

立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』の解題と翻刻

川崎 佐知子

立命館大学図書館西園寺文庫の蔵書は、西園寺公望の寄贈書を中心に構成されている。そのなかに、清華家西園寺家に伝来した和歌御会に関する資料群が含まれていることは、立命館大学図書館編『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』（立命館大学図書館 一九九〇年）に指摘されている。本稿は、そのひとつである『新院御会部類集』（請求記号〈SB／Sh62〉、資料番号〈9810037156〉）の解題と翻刻である。

〔解題〕

『新院御会部類集』は、袋綴冊子本一冊。寸法は、縦二八・六糎、横二〇・六糎。表紙は、薄萌葱色無地紙表紙。表紙の左肩に、打付書で、外題「新院御会部類集自天和二至三」を墨書。見返しは本文共紙。料紙は楮紙。内題は「天和二年九月四日 新院御当座」（墨付第二丁表）ほか、各歌会の日付、および歌会の種別などを書く。一面一行書き。墨付丁数六二丁。遊紙は、巻頭三丁、巻末二丁。巻頭に、方形双郭陽刻朱印（印文「実輔」）のほか、現所蔵者の印（「立命館大学図書印」・「公爵西園寺公望寄贈」・「西園寺文庫」）を捺す。江戸前期写。

内容は、天和二年（一六八二）から翌天和三年までの二年間に実施された新院（後西院、一六三七―一六八五）主催の和歌御会の和歌である。御会は、実施された日付の順に配列されている。

巻頭には、印文「実輔」の方形双郭陽刻朱印が捺されている。これは、

西園寺実輔（一六六一―一六八五）の蔵書印である。橋本政宣氏『公家事典』（吉川弘文館 二〇一〇年）により、出自と経歴を確認すると、西園寺実輔は、関白従一位左大臣鷹司房輔（一六三七―一七〇〇）の二男。西園寺公遂（一六六三―一六七八）の後継として、西園寺家に入った。延宝九年（一六八二）八月十一日、権中納言となり、天和二年十一月三十日、前名兼敦を、実輔と改名。天和三年二月十四日、中宮権大夫となる。貞享二年（一六八五）正月五日、二十五歳で死去する。死去の年月日から、『新院御会部類集』は、御会が行われた当時に比較的近い時期に写された可能性があるといえる。

田中隆裕氏「後西院の和歌・連歌活動について」（『和歌文学研究』第五三号 一九八六年三月）によると、後西院の和歌活動はおおよそ三十三年間におよび、「第一期和歌時代」「第二期連歌時代」「第三期並立時代」の三つに区分できるといえる。このうち、第三期は、後西院が四十五歳から四十八歳にかけての期間である。和歌御会は、延宝九年（一六八二）八月二十九日に後水尾院の諒闇が明けて後の天和二年九月四日の当座御会が初度であり、崩御前年の貞享元年（一六八四）十二月十七日まで継続、計四十六度興行された。おもな作者は、第一期からの中院通茂、高野保春、平松時量、風早実種、櫛笥隆慶に加え、後西院皇子の有栖川宮幸仁親王・員宮（貞享三年に元服、のちの八条宮尚仁親王）、近衛基熙、平松時方・石井行豊（ともに平松時量男、母は飛鳥井雅章女）、飛鳥井雅豊（飛鳥井雅章男）、

裏松意光（烏丸光廣曾孫）、日野資茂（日野弘資男）、烏丸光雄（烏丸資慶男）である。

『新院御会部類集』収載の和歌御会は、右の第三期の前半にあたる。作者二十四名による総歌数七百五十六首。各御会は、はじめに日付と当座・兼日の歌会の種別などが示されている。当座の場合、題により部類され、題の下に作者名が記される。兼日は、作者の立場により秩序立てられ、作者名とともに官位が記される。和歌は、すべて一行書きである。

『新院御会部類集』収載の和歌御会・作者については、立命館大学卒業生の中島結香氏による卒業論文「西園寺文庫蔵『新院御会部類集』について」（『論究日本文学』第一〇七号 二〇一七年十二月刊行予定）に詳しく論じられている。

本稿では、後西院の廷臣で、『新院御会部類集』の作者でもある近衛基熙（一六四八—一七二二）の日記『基熙公記』（公益財団法人陽明文庫蔵）などを参考に、『新院御会部類集』収載和歌御会について、いくつかの問題を提起する。

『新院御会部類集』には、計二十九回の御会が収載されている。内訳は後掲（翻刻）を参照されたいが、天和二年九月より同年十一月まで（翻刻）御会通し番号1〜4）と天和三年正月・六月（6・17）は当座のみ、そのほかは同日に兼日・当座がおこなわれた。少なくとも、天和二年九月より同三年十二月までは、毎月開催されていたことが確認できる。これらを、古相正美氏「近世御会和歌年表」（『中村学園研究紀要』第二十七号 一九九五年三月）に对照すると、収載和歌御会はすべて記されている。同論文には、ほかに、「天和二年十月六日新院当座」・「同年十二月十七日新院当座」・「天和三年一月十八日新院（始）」・「天和三年二月二十二日新院当座」・「天和三年三月二十二日新院当座」・「天和三年六月十二日新院月次」・「天和三年十月二十七日新院当座」を見い出す。さらに詳細な検討

を要するが、御会資料に記載される日付の異同の可能性もあるだろうか。

さらに、『新院御会部類集』の兼日御会は、作者の立場によって並べられていることに触れた。いずれも筆頭は主催者の後西院である。それに続く配列について少々確認しておく必要があるだろう。たとえば、5「天和二年十二月十七日御月次」の場合、表記されるとおりに作者名を列挙すると、「無記名（後西院）」・「員丸」・「左大臣藤原基熙」・「兵部卿幸仁親王」・「権大納言藤原経慶」ほか（以下十六名は略す）である。左大臣である近衛基熙が、幸仁親王より上座であるのは、「禁中並公家諸法度」の「一、三公之下親王」の条文に拠るのである。では、同じく後西院皇子で元服前の員丸（員宮）の位置が、後西院に次ぐのは何に基づくのだろうか。

じつは、天和二年九月に、後西院が和歌御会を企てたとき、このことが問題になったようである。『基熙公記』天和二年九月四日条に、つぎのようにある。

一、員宮座次事、可為何様哉之由、先日伺公之序被仰合、余申云、元和七ヶ条以来、親王叙品之後、左右大臣ノ可為次座之由、被定置、仍當時為其定、於員宮者、未叙品給、而後水尾院年中行事にも、御かたつきのなき宮方、殊におもくせらる、よし、被遊置間、只先予令着御座左給之後、余可着御右方、於然者、兵部卿宮（幸仁親王）可被着余次、於宜□、兵部卿宮与員宮兄弟之礼も、旁不可有障歟之由、申入之処、尤之由有仰、仍自今日如上被相定了、

（『基熙公記』天和二年九月四日条）

御会当日以前（『基熙公記』では、天和二年九月二日に『後拾遺集』校合のため院参している）、その折であろう）、後西院から員宮の座次について仰せがあった。基熙は、叙品後の親王は、「元和七ヶ条（元和十七ヶ条）」の誤りであれば、「禁中並公家諸法度」により、左右大臣の次座とした。そ

のうえで、未だ叙品されていない員宮については、『後水尾院年中行事』に、「御かたつきのなき宮方、殊におもくせらるゝよし」とあることを鑑みるべきだとし、当日は、予め員宮が後西院御座の左に着し、のちに、基熙が御座の右方に、さらに幸仁親王が基熙の次座に着す、という案を奏上した。事前の念入りな打ち合わせを経たうえで、御会当日を迎えていたのである。右は当座歌会での席次であるが、この秩序は、『新院御会部類集』収載の兼日御会にも一貫している。一度限りの取り決めでは終わらず、以後の定例となったものである。

天和二年九月四日の歌会は、そのほかの点でも以降の規範となったように思われる。つぎに、『基熙公記』同日条を掲げる。

辰刻参 新院〔後西院〕、着烏帽子、小直衣、指貫〔依非殿儀也、近代替大概如此〕先召内々方、有御言談、兵部卿宮〔幸仁親王〕兼被祇候、暫之後、各参集、次無幾程出御〔御書、右也〕余先進着〔御座、同前〕烏丸亜相〔烏丸光雄〕、中院前大納言〔中院通茂〕、以下、左右相分着座、惣而無異事、但、各乍在座、思案和哥、午下許、各詠出、献詠草、依人被加御詞、清書了、被講和哥、定経朝臣〔今城定経〕勤之、夕御飯之後、各退出、其時未半刻歟、

一、題廿首〔勅題〕、御製二首、兵部卿二首、余二首、
一、御陪膳、中院前大納言、依御気色、当座勤之、
一、出座人々、員宮〔十二才〕、兵部卿宮、余、中院前大納言、日野大納言〔言光〕〔烏丸光雄〕、日野中納言〔日野資茂〕、前平中納言〔平松時量〕、今城前中納言〔今城定経〕、風早前宰相〔風早実種〕、穂波三位〔穂波経尚〕、保春朝臣〔高野保春〕、隆慶朝臣〔柳崎隆慶〕、定経朝臣、宣勝朝臣〔外山宣勝〕、時方朝臣〔平松時方〕、行豊朝臣〔石井行豊〕等也、
一、員宮座次事、〔以下、前掲のため略〕
一、納言以下、硯、紙等益送、院非臧人勤之、

〔基熙公記〕天和二年九月四日条
基熙は辰刻に参院した。烏帽子・小直衣・指貫といういでたちであった。新院御所の御書院に、後西院が出御後、基熙と幸仁親王が着座し、烏丸光雄・中院通茂以下が左右に分かれて着座。午下刻に詠出。詠草を献じた後、人によっては御詞が加えられ、清書。披講は今城定経がつとめた。夕御飯の後、未半刻に退出。基熙室の品宮常子内親王も、日記に つぎのように記している。

四日、戌申、曇
新院にて御くはい有て、左府も出座也、辰刻よりまいり給ふ、申刻程二退出也、

〔无上法院殿御日記〕天和二年九月四日条
『新院御会部類集』1「天和二年九月四日新院御当座」は二十首、題は「初秋朝」・「庭萩風」・「夜鹿」・「夕虫」・「山月」・「浦月」・「聞擣衣」・「杜紅葉」・「暮秋霜」・「寄雲恋」・「寄雨恋」・「寄木恋」・「寄草恋」・「寄糸草」・「暁鶏」・「簷松」・「窓竹」・「山家煙」・「寄神祝」である。これらは、『基熙公記』によると「勅題」、すなわち後西院による出題である。後西院は「初秋朝」・「夜鹿」歌、基熙は「寄糸恋」・「山家煙」歌、幸仁親王は「暮秋霜」・「暁鶏」歌の各二首、ほかは各一首である。これも、『基熙公記』の記述に一致する。

『新院御会部類集』の17「天和三年六月御月次」は、日付が書かれていない。古相正美氏「近世御会和歌年表」（前掲）によれば、C『御会集』（賀茂神社三手文庫所蔵）に、「天和三年六月十二日」とある。いっぽう、『新院御会部類集』17の後西院（1・2）歌を、『水日集』（列聖全集編集会編『列聖全集 御製集第七卷』列聖全集編集会 一九一六年）によって確認すると、それぞれ「天和三年六月二十五日」とある。また、『新院御会部類集』17の5・6・11・13・17・21・23・33・35・37歌は、上野洋三編『近

世和歌撰集集成』第2巻・堂上篇上（明治書院 一九八七年）の『部類現葉和歌集』に入集する。これらは、いずれにも「天和三年六月二十五日」とある。さらに、『新院御会部類集』17の基熙（5・6）歌については、『近衛基熙詠草』（陽明文庫蔵、〈60362〉〈60370〉など）に「天和三六廿九新院御月次兼日」とある。『基熙公記』・『无上法院殿御日記』には記載がない。他出資料の日付は一樣ではなかった。結局、『新院御会部類集』17「天和三年六月御月次」の日付を確定することはできなかった。

基熙は、後西院が主催した歌会について、しばしば「人数不足」と記す。つぎの記事は、『新院御会部類集』10「天和三年三月二十一日御当座」に関する記事である。

依和歌御当座、参 新院、二十首、人数不足、仍御製二首、余亦詠二首、午刻後、退出、

〔基熙公記〕天和三年三月二十一日条

「人数不足」のため、後西院と基熙は二首ずつ詠じたとある。たしかに、10「天和三年三月二十一日御当座」に、後西院の題「関花」「江花」（9・13）歌、基熙の題「初花」「河花」（1・11）歌を認めうる。こうした状況が存したことを含み置き、今後も後西院の和歌活動の検討を続けたい。

後西院には、歌集『水日集』がある。列聖全集編集会編『列聖全集

御製集第七巻』（列聖全集編集会 一九一六年）に収められるそれによると、四四四頁から四六九頁にかけての「雑 雜月次御製」に、天和二年九月四日より貞享元年十二月二十七日までの御会における後西院歌計百九十三首が含まれている。また、中院通茂歌は、中院通茂の自撰家集『中院通茂和歌集』（原本は京都大学附属図書館蔵〈中院IV・171〉、翻刻は兼築信行氏「翻刻 中院通茂和歌集（一）―（四）」『研究と資料』第十八輯 一九八七年十二月・『同』第十九輯 一九八八年七月・『同』第二十輯 一九八八年

四

十二月・『同』第二十一輯 一九八九年七月）、および同氏「翻刻 中院通茂和歌集〔定数歌篇〕」（『早稲田大学高等学院研究年誌』三十三 一九八九年三月）に掲載されている。）にある。近衛基熙に関しては、陽明文庫に詠草類が存している。このほかにも、一次資料も含めた膨大な資料が存するであろう。ただちにすべてを把握することは困難であるが、先学の偉業に恩恵を受けながら、少しずつ資料を見出し作業を重ねていく所存である。本稿は、その端緒として、立命館大学図書館西園寺文庫所蔵の御会資料を紹介し、これが後西院の和歌活動に関連することを述べたのである。

立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』の全文翻刻の公表、および機関リポジトリでの公開については、立命館大学図書館より許諾を得た。

本稿は、科学研究費基盤研究（C）課題番号〈17K02335〉の成果の一部である。

〔凡例〕

立命館大学図書館（西園寺文庫）蔵『新院御会部類集』一冊（請求記号〈SB / 911.157 / Sh62〉、資料番号〈9810037156〉）を翻刻する。翻刻に際しては、原文に忠実であるよう努めたが、つぎの方針のもと、手を加えた箇所がある。

- 一、漢字は、原則として、通行字体を用いた。
- 二、仮名遣いは、原文のとおりとした。
- 三、改行は原文のとおりとした。丁うつりを、「」（一丁表）のように示した。
- 四、各歌会の冒頭に、通し番号・日付・歌会の別などを挿入した。これらは、『』内に入れた。

五、各歌会の和歌に、歌会ごとの通し番号を付した。

六、上野洋三氏編『近世和歌撰集集成』第二巻・堂上篇上(明治書院一九七七年)の1「新明題和歌集(略称、新明題)」・2「新後明題和歌集(略称、新後明)」・3「新題林和歌集(略称、新題林)」・4「部類現葉和歌集(略称、部類現)」に所載の和歌は、該当歌の左の「」内に、『近世和歌撰集集成』の歌集番号・歌集名の略称・歌番号を示した。本文に異同がある場合は、句ごとに記した(4「部類現葉和歌集」の場合は、日付なども記した)。なお、漢字表記や仮名遣いの差異は考慮しない(題の漢字表記を除く)ことを原則とした。また、作者名に官位を表記する兼日歌会《5・6・8・9・11・14・16・17・19・20・25・27・29》に限り、官位表記有無の記述を省いた。

七、『水日集』(列聖全集編集会編『列聖全集 御製集第七巻』列聖全集編集会一九一六年)・『中院通茂和歌集』(兼築信行氏「翻刻 中院通茂和歌集(一)」(四)「『研究と資料』第十八輯 一九八七年十二月・『同』第十九輯 一九八八年七月・『同』第二十輯 一九八八年十二月・『同』第二十一輯 一九八九年七月)、「翻刻 中院通茂和歌集(定数歌篇)」(『早稲田大学高等学院研究年誌』三十三 一九八九年三月)・『応円満院殿御詠歌』(陽明文庫蔵、資料番号〈66099〉〈76100〉)に所載の和歌は、該当歌の左の「」内に、各歌集名・歌番号を示した。本文異同の採択基準は、六に同じである。

〔翻刻〕

《1 天和二年九月四日 新院御当座》

天和二年九月四日

新院御当座

初秋朝

1こゑたてつ朝けの風も秋あさき露の玉さ、一夜二よに

〔1新明題¹⁸¹⁰作者「新院」初「声たつる」三「秋あさき」、『水日集』633結

「ひと夜ふた夜は」天和三年九月四日〕

野萩露

時量

2置露をあたらいといひて払はすはす野の萩の色をみましや

〔1新明題2001

庭萩風

資茂

3軒ちかくなとうへをきてた、ならぬ秋の声きくおきのうは風

〔1新明題1983

夜鹿

4妻恋の友としらすや小男鹿のこゑきく人もひとりぬるよを

〔2新後明691作者「後西院」二「友としらてや」天和・二・九・四

夕虫

通茂

5我のみの秋とやかこつきりく、すうきにはたれもたえぬ夕を^(二丁表)

〔1新明題2125

山月

隆慶

6雲霧をほらひつくして山のはにかせを光の月のさやけさ

〔4部類現4439作者「隆尚」結「月のさやけき」同(天和)二・九・四

浦月

経尚

7月影はなみの千里に住吉のうらの秋霧消ものこらて

〔4部類現4575四句「浦の朝霧」天和二・九・四

聞擣衣

実種

8 今のはやくも身にしむ里人のうつあさきぬの声もよさむに

〔4部類現4893 四「打麻衣」〕〔天和二・九・四〕

杜紅葉

行豊

9 またきより時雨はもりの下かけに染て色こき秋の紅葉々

〔1新明題2603〕

暮秋霜

幸仁

10 くれて行秋のかたみの露もいま結ひかへたる野へのはつ霜

寄雲恋

定淳

〔二丁裏〕

11 あはれわかかひなき名のみ立雲の身は中空に消も果なて

〔4部類現7897 天和二・九・四〕

寄雨恋

定経

12 かならずと契りをきしも徒にこぬよしられて降あめそうき

〔4部類現7948 天和二・九・四〕

寄木恋

宣勝

13 つれなさのおなしたくひにみるもうしかはらぬ軒の松のみさほを

〔4部類現8206 三「みるもうき」〕〔天和二・九・四〕

寄草恋

時方

14 うらかる、秋も末野の葛かつらたへすや風のかへすうらみに

〔3新題林7178 初「うら枯し」〕

寄糸恋

基熙

15 我おもひみたる、いとすちくをしかし人のうきふしとたに

〔1新明題3885、『応円満院殿御詠歌』1341〕

暁鷄

幸仁

16 一方と聞し枕にかすそひてとりの八声に告るあかつき

〔1新明題4188〕

簷松

光雄

六

17 いくたひか紅葉にもれて軒の松秋なき色をあきにみすらむ

〔1新明題4141 題「軒松」〕

窓竹

員丸

18 ふらぬまも雨かとはかりくれ竹のよなくかせの窓をうつ声

〔1新明題4154〕

山家煙

基熙

19 すむ人のありとはかりに朝夕の煙をたえぬ山辺をもとへ

〔1新明題4089、『応円満院殿御詠歌』1424〕

寄神祝

保春

20 あふくそよすゑ久堅の天照す神のこゝろのくもりなき世を

〔1新明題4588〕

《2 天和二年十月六日 御当座》

十月六日

御当座

行路時雨

幸仁

1 すむ人のしらぬやとりもとひよらんまなく時雨々さとの中道

〔1新明題2669 初句「住人は」〕

橋紅葉

2 さそひ来て紅葉をしけは是も又風のかけたる山の河はし

〔1新明題2700 作者「後西院」結「山河の橋」、『水日集』637 題「橋落葉」結

「山川のはし」〕〔同（天和二）年十月六日〕

寒草霜

光雄

3 かれのこる小篠かうへも此朝け霜に色なき庭のさひしさ

〔1新明題2729〕

冬月

員丸

4 ふくからに木の間はれ行冬の夜のあらしや月の光そふらん

湊千鳥

隆慶

5方くゝに友よひかはしとまり舟よする湊に千鳥なく也

〔1新明題 2876〕

朝雪

定淳

6とへかした跡もいとはし降そめてまたひとへなる雪の朝を

〔1新明題 2970〕

夕雪

通茂〔三十三表〕

7降初しけふたに人は跡とめてかきねの雪の色もくれぬる

〔1新明題 2971三〕跡たえて〕

寄山恋

定経

8いつまでか分まよふらんつくは山はやまの露と身は消もせて

寄野恋

行豊

9よしやたゝいく野々道は遠くともふみみむ程の便たにあれ

〔1新明題 3788〕

寄原恋

資冬

10たくひそとみるもかなしな霜ふかき末の、原のかれしこゝろを

〔1新明題 3786二〕みるもかひなし〕

寄河恋

時量

11人もおもへ我も忘れし冬川の氷にとつる逢せなりとも

〔4部類現 8074〕天和二・十・六〕

寄浦恋

保春

12いかにせん我身をうらのみるめさへ波のよるゝつもるおもひを〔三十三表〕

〔1新明題 3801〕

蘆間鶴

雅豊

13霜しろき入江の蘆のひとつ色にみえて寒けき鶴の毛衣

〔1新明題 4182〕

海辺眺望

時方

14なかめやるかきりも波のわたの原行もかへるも仲の友舟

〔1新明題 4291結〕沖の友ふね〕

寄榊神祇

長義

15榊葉のはかへぬ色に契りをかんいまも神代のふるきためしを

〔1新明題 4527結〕ふるきためしに〕

《3天和二年十一月七日御当座》

霜月七日

御当座

春天象

基熙

1色もなき空の緑も時しるや霞の衣春のひかりに

〔1新明題 571、〕応円満院殿御詠歌〕 379

夏々々

行豊

2暮かたき日影も遠の山のはにあやしき雲の峰そかさなる〔四十三表〕

〔1新明題 1573〕

秋々々

時方

3彦星の逢瀬うれしく霧晴て夕月うつる天の川とに

〔1新明題 1910結〕天のわたりそ〕

冬々々

4有明の月とみしまの白妙はゆきの底なる朝朗かな

〔1新明題 2754作者〕後西院〕、『水日集』 639 〔同(天和三年十一月七日)〕

春地儀

宣勝

5長閑なる春の光に大比叡やをひえの雪の今朝のむら消

〔1新明題 576〕

夏々々

定経

6むすひよるなかれもきよき瀧つせに夏をわするゝ水のすゝしさ

秋々々

長義

7花青葉今は紅葉に移り行時をみせたる秋の山のは

〔1新明題1942 四「色をみせたる」〕

冬々々

定淳〔四丁巻〕

8さえしよの嵐の程を此あさけ汀にみせて氷る池水

〔1新明題2759〕

春植物

貝丸

9吹となき庭の春風打なひく柳のいとにみえてのとけき

〔1新明題586〕

夏々々

10人のよのまなふは道にならへかし竹のことみる日はいくか、は

〔1新明題1705 作者「後西院」二「まなふる道に」、『水日集』641 二「まなふる道に」〕同（天和二年十一月七日）

秋々々

基熙

11立ならふ紅葉にはへて松杉のみとりも秋をしらぬものかは

〔1新明題1948、『応円満院殿御詠歌』925〕

冬々々

経尚

12色く／＼に秋はにしきとみし木々もうつもれはつる雪の白妙

〔1新明題2763 初「色く／＼の」〕

春動物

幸仁

13さすかねになきてこそゆけ帰雁花にわかる、春の心は〔五丁巻〕

〔1新明題589〕

夏々々

隆慶

14物ぞ思ふた、一声のほと、きすしたふ名残の雲のはたてに

〔1新明題1713〕

秋々々

時量

15ひかぬ間も風のなることおとろくや門田の稲を立村す、め

〔1新明題1945 四「荇田のいねを」〕

冬々々

資茂

16立さわく色そわかる、夕鳥梢の雪をはらふ羽風に

〔1新明題2764 初「ねにかへる」二「色もわかれて」〕

春雑物

通茂

17紅葉のはやしにまさる花の陰こ、にと、めむはるの小車

〔1新明題593、『中院通茂和歌集』179 詞書「天和二年後西院当座御会春雑物」〕

夏々々

実種

18涼しさの風待いる、窓の内はまた、くよはの灯もよし

〔1新明題1727〕

秋々々

意光〔五丁巻〕

19か、けてやまなふる人はしたしまん夜長き窓の灯のもと

〔1新明題2473〕

冬々々

雅豊

20初瀬山尾上の雪のふかきよにうつもれ残る鐘の音かな

〔1新明題2765〕

《4 天和二年十二月十七日御当座》

十二月十七日

御当座

初雪

1 つもりてのいつは有とも又やみむしはしなきえそ今朝の初雪

〔1新明題2963 作者「後西院」四「しはしは消そ」、『水日集』649 同（天和二年十二月十七日）〕

浅雪

資茂

2 今一重つもれとこそは松竹のけちめはうすき雪にみるより

〔1新明題 2981 題「残雪」^題〕

深雪

通茂

3 晴やらぬ日かすもいくかけぬかうへに降敷雪の色をかさねて

〔1新明題 2982 〕

積雪

資冬^{〔六十一巻〕}

4 けふ幾日木々の梢はうつもれて庭白妙に雪そつもれる

〔1新明題 2990 結「雪はつもれる」〕

望雪

時量

5 欄によるみし雪の花よりもあさ日さやかに匂ふやま眉

〔1新明題 3085 〕

嶺雪

実種

6 白妙の花のよそめの面影も思ひ出たるみねの雪かな

野雪

光雄

7 つもれ猶色なき草の冬枯に待こし野への今朝のしら雪

〔1新明題 3015 〕

里雪

幸仁

8 降つもる雪のうちにも立のほるけふりそしるへ里の一むら

〔1新明題 3020 〕

田雪

基熙

9 消ぬ間はかり田の面の稲藁の数くみする今朝のしら雪^{〔六十一巻〕}

〔1新明題 3029 三「稲茎の」、『応円満院殿御詠歌』 1031 〕

浜雪

10 からすかいそれもむもれて雪に今いと、しら、の浜そ名におふ

〔1新明題 3045 作者「後西院」、『水日集』 651 「天和二年十一月十七日」〕

竹間雪

貝丸

11 ふりつもるその、呉竹よなくのあらしはきかて雪おれのこゑ

〔1新明題 3074 二「遠の呉竹」〕

松上雪

行豊

12 松の葉のいつともわかぬ色もけさつもる岡辺の雪にめつらし

〔1新明題 3065 〕

檜原雪

定淳

13 このまゝに消すもあれな花とみる檜原かうへの今朝の白雪

〔1新明題 3069 三「花とみん」〕

雪中鳥

意光

14 みたれ蘆のみなはの雪に立鷺の蓑毛の色も今朝はわかれす

〔1新明題 3061 初「またれ蘆の」結「けさはわかれて」^{〔七十一巻〕}〕

雪中獸

時方^{〔七十一巻〕}

15 朝またきさきたつ駒の跡みえて誰か関ちの雪にまよはむ

〔1新明題 3062 結「雪まとはなむ」〕

社頭雪

長義

16 神かきは松にならひて降つもる雪のうちより匂ふ梅か、

〔1新明題 3051 初「神かきの」〕

古寺雪

宣勝

17 つもりぬる尾上に雪のふる寺を有としらせて鐘ひ、くなり

〔1新明題 3052 二「尾上の雪の」〕

山家雪

定経

18 柴人のかよふ道さへたえはて、雪にさひしき山の下庵

〔1新明題 3008 〕

旅行雪

実富

19 かきくらす雪そわりなき降そは、旅のゆくての道まよふまで

名所雪

隆慶

「1新明題4371三「降かは、」

20 思ひやる雪の高峰やいかならん都のふしの今朝のなかめに〔七丁裏〕

「1新明題3082二「雪の高根の」

《5 天和二年十二月十七日 御月次》

天和二年十二月十七日

御月次

海辺雪

1 つもる嶋つもらぬ波もひとつにてしろきをみれば雪の明ほの

「1新明題3031作者「後西院」、『水日集』645「同（天和二年十二月十七日）」

鶴駒砌

2 群てゐる田つはうつし絵かくこそと砌になれて遊ふけしきや

「1新明題4171題「鶴砌駒」作者「後西院」、『水日集』646「同（天和二年十二月十七日）」

員丸

3 今朝みれば波もひとつに白妙の雪にはれたるあはちしま山

4 末とをき千世の友とや契りおかむ芝砌になる、しら鶴

左大臣藤原基瀬

5 今朝のあさけつもらぬ波もうつもれてさなから雪を寄る浦かな

「1新明題3032結「よする浦舟」、『応円満院殿御詠歌』1037

6 我道のしるへを思ふみきりにはなれもなれてよ和哥のうら鶴〔八丁裏〕

「1新明題4171四「馴てなれてよ」、『応円満院殿御詠歌』1497

兵部卿幸仁親王

7 みるま、にかきもせめはやいひしらぬ絵嶋かさきのゆきの詠を

「4部類現6121二「かきもとめはや」天和二・二十二・十七」

8 むれてゐる砌の鶴の千世のかすこれもつきせぬことのはの種

一〇

「4部類現9521「天和二・二十二・十七」

権大納言藤原経慶

9 吹からに波も立きてあまころも袖のうらはの雪の夕かせ

10 みちしありとしはの砌に所えて幾世なれ来る和かの浦鶴

同 光雄

11 わたつ海のかさしの花も散雪のつもらぬかたもしろき浦かせ

「1新明題3034題「江辺雪」結「白き波かせ」、4部類現6122「同（天和二・十二・十六）」

12 この葉の色そふ庭の松かえにきつ、なる、や和かの浦鶴

正二位源通茂

13 明るよの入江の雪にうかへるやたか山陰のかへるさのふね〔八丁裏〕

「1新明題3033題「江辺雪」、4部類現6023「同（天和二・二十二・十七）」、『中院通茂和歌集』717詞書「天和二年同（後西院）月次海辺雪」

14 この君の砌にまなへまな鶴の千年の後はしらぬ千とせも

「1新明題4173題「鶴砌駒」

権中納言藤原資茂

15 音さえし浪の千里も明石かた礪のとまやは雪白くして

「1新明題3038題「江辺雪」、4部類現6124初「雲〔よる〕さえし」四「礪の外山は」

「同（天和二・二十二・十七）」

16 舞あそふ田鶴も千とせや松風のしらへ世に、ぬ洞のみきりに

「1新明題4174題「鶴砌駒」二「たつもちとせの」

従二位平時量

17 一方に山とそつもるうら風の真砂に雪をふきあけの浜

「1新明題3039題「江辺雪」

18 洞中に馴ゐる鶴のなれのみかたれかあふかぬすてぬ恵を

従二位藤原定淳

19 夕附日うつろふかたの海はれて浦山とをくつもるしら雪
20 なれてすむしはの砌の松か枝に千世をかさねん鶴の毛衣

同 実種〔九十表〕

21 枯たてる蘆へはかりを海のうちへの雪の根かくる所とやみる

〔1新明題3040題「江辺雪」〕

22 君かへむ千とせの後をしら鶴もあかすやなる、芝の砌に

従三位藤原意光

23 明わたるなみにわかれて白妙の雪はさたかにみほのまつ原

〔1新明題3035題「江辺雪」〕

24 契りをく千年もしるし白鶴のたち居なれ行芝のみきりに

従三位藤原経尚

25 うら風の空かきくらす雪の日はしほくみたゆる須磨の海士人

〔1新明題3036題「江辺雪」〕

26 限りなき君か千とせのともつるや芝の砌になれてすむらし

中務大輔源資冬

27 夕間暮浪路の末をなかむれは礧山とをく雪そふりつむ

〔九十表〕

28 住馴て猶行末も契らまし君かみきりの千よのともつる

左近衛権中将藤原隆慶

〔1新明題3037題「江辺雪」〕

30 限らしな千とせの後もとも鶴の馴てたのしむ芝の砌は

右近衛権中将藤原定経

31 あま人の住かは雪にうつもれて煙にしるき塩かまのうら

32 限りなき齢を君に契り置て芝の砌になる、友つる

左兵衛権佐藤原宣勝

33 よせかへる礧辺の波は音さえて州崎にこほる雪そしつけき

34 千世ふへき君か齢を友鶴やなれて砌の松に住らん

少納言平時方

35 漕出し浪路の雪をあま小舟のせてやかへるをのかうらく〔二〇丁表〕

〔1新明題3041題「江辺雪」〕

36 洞のうちにつきせぬ色を君そみむ千世松かせの霜の白鶴

少納言平行豊

37 難波かたあまの苦やはうつもれて入江の雪をいつる釣ふね

〔1新明題3042題「江辺雪」〕

38 つかへつ、たれも千とせの友鶴となれて契らん芝の砌そ

左近衛権中将藤原雅豊

39 なかめやる浪の千里の明ほのに一むらしろき雪のとをしま

40 末とをく聞てそなれむ君かすむ砌のつるの千世よはふ声

大膳大夫菅原長義

41 今朝みれば波のうへにも白妙の雪をのせたるあまの釣舟

42 契り置ておなし千とせの友鶴やみきりの松に馴てすむらん〔二〇丁裏〕

《6 天和三年正月二十八日新院御会始》

天和三年正月廿八日

新院御会始

1 何かよの春に打とけぬものやあるむすほ、れたる水も声して

〔2新後明35作者「後西院」四「むすほふれたる」結「水に声して」、『水日集』653結「水も音（声）して」〕同（天和三年正月二十八日御会始）

員丸

2 春きぬと岩井のし水音たて、むすひし水とけてなかる、

3 打とくる水に声をまし水にあまる岩ねもはるをみせつ、

左大臣

〔1新明題68、〔応円満院殿御詠歌〕 397〕

兵部卿幸仁親王

4 音そふやとくる水の打いて、岩もる水も春をしるらん

〔2新後明36四「岩もる水に」

権大納言藤原経慶

5 千世のこゑ泉の音もいやましに水とけゆくほらの春風〔二丁表〕

同 光雄

6 せき入る泉そひ、くあさ水とちしあらしは春にかすみて

権中納言藤原資茂

7 日にみかく春の御池のひもか、みとけてみなきる滝つしら浪

〔1新明題70〕

正二位平時量

8 長閑しな氷ふきとく柳かけ清水も春の風になかれて

従二位藤原定淳

9 氷ぬし岩根のし水はるかせにとけて音そふ声ものとけし

同 実種

10 岩間もる水のしらへや春はとくとくる水のことさらの声

正三位藤原実富〔二丁裏〕

11 氷とけ春てふことのしらへにやななれ泉のこゑあはすらん

正二位源雅喬

12 氷ぬし砌にこゑをまし水やはるを岩ねに留て落らん

〔1新明題69〕

従三位藤原意光

13 春に今氷もとけてまし水の岩ねもりくる音そ長閑き

中務大輔源資冬

14 吹風に氷とけゆく音そへてはるになる、山のした水

修理権大夫藤原保春

15 春といへは氷も浪のこゑそへていはねを留てをつる滝つせ

左近衛権中将藤原隆慶

16 ひ、く也春を千とせの松かせの岩井の清水氷なかれて〔二丁表〕

右 定経

17 音そ、ふ氷もけさは春風にとくるはこやの山の下水

左近衛権佐藤原宣勝

18 うち出る氷は浪のはつはなをみせて岩ねにひ、くまし水

少納言平時方

19 春そ、ふ岩間の氷とくるよりわきて泉の末のなかれも

同 行豊

20 風わたる岩ねのひ、き音そへぬとくる氷をなかつみは

左近衛権中将藤原雅豊

21 氷さへ今朝はなかれて岩間ゆく水のひ、きそ春に長閑き〔二丁裏〕

《7 天和三年二月二十七日御当座》

天和三年二月廿七日

御当座

遠山霞

1 墨かきのえもいひしらすた、みなすとを山うすく霞む曙

〔1新明題149作者「後西院」、『水日集』660四「遠山隔て」〕同（天和三年二月二十七日）

河上柳

雅豊

2 河水のおなしみとりに色そへて春の柳のかけうつすらん

〔1新明題529〕

花処々

幸仁

3 此ころはいたりいたらぬ方もなきめくみを花の色にみすらん

野亭董

通茂

〔4部類現 1463 〔天和三・二・廿七〕

4 一夜ねし名残あかすやすみそめてすみれ咲野にむすふかり庵

〔1新明題 1054〕

夕雲雀

時方

5 暮ふかき野辺の霞のうちつけにおつるもそれと雲雀鳴声（二三丁表）

〔1新明題 1006 結 〔雲雀鳴也〕

待郭公

員丸

6 なきぬへきた、一声をほと、きす幾夜つれなくまちあかすらん

〔1新明題 1232 二 〔一声をたに〕

夏常夏

意光

7 うすくこく秋の花のをませの内にみせて咲そふ庭のなてしこ

〔1新明題 1561〕

七夕雨

経慶

8 恋わたる思ひもはれすふる雨に契りかひなきかさ、きの橋

〔1新明題 1866〕

行路薄

実種

9 秋風はふかても野へを行袖におはなかたより露そみたる、

〔1新明題 2027 作者 〔定種〕

深夜月

長義

10 更る夜のともしひほそき窓の内にかたふく月の影そさしそふ

〔4部類現 4418 〔同（天和）三・二・廿七〕

池辺菊

宣勝（二三丁裏）

11 水きよき池辺にたてる菊の花かけは数そふ盛りをそみる

〔1新明題 2531〕

紅葉遍

時量

12 こ、かしこ紅葉にあかぬ友人やまたみぬ方にあすを契らん

〔1新明題 2593〕

浦千鳥

隆慶

13 浪よする浦はの松の遠方に友よふ千鳥行かへりなく

〔1新明題 2873〕

関中雪

行豊

14 おりくの人めもかる、浅茅生の雪にとちたる宿の淋しき

〔1新明題 3060〕

不逢恋

定経

15 しられしなあふこと浪に袖ぬれてうきねを須磨のうらみ侘ぬと

〔4部類現 6911 〔天和三・二・廿二〕

歎頭々

資茂

16 いかにせむ袖の涙の玉かしは藻にうつもれすあらはれん名を（二四丁表）

〔1新明題 3208〕

恨絶々

定淳

17 いかにせむた、一ふしにことつけて絶はてにける中のうらみを

〔1新明題 3590 作者 〔同（淳房）

名所松

実富

18 行舟も木間にみえてしかのうらやひとりふりぬる辛崎の松

古寺鐘

保春

19 泊り舟うきねの夢をさますかな礒山寺のかねのひ、きに

〔1新明題 4023、4部類現 8862 〔天和三・二・廿七〕

寄国祝

基熙

20 あふくそようかへる波の淡路嶋六十あまりの国のはしめと

〔1新明題 4603 結 〔国のはしめを〕、〔応円満院殿御詠歌〕 1619〕

《8 天和三年二月二十七日兼日題御前二而》

天和三年二月廿七日

兼日題御前二而

夜思梅

1 夢ならはなかく花の色もみむやみのうつゝの夜半の梅か、〔一四丁裏〕

〔1新明題424作者「後西院」、『水日集』656「天和三年二月二十七日」

待久恋

2 あし田鶴のねに鳴心おもひやれ待ほと久になりし恨に

〔1新明題3403作者「後西院」、『水日集』658「同（天和三年二月二十七日）」

員丸

3 色わかすかきねの梅も暮る夜は吹くる風に匂ふはかりそ

4 たのめつゝまてと契りし偽りも久しく成ぬ幾夜明して

左大臣藤原基熙

5 心のみ咲木のもとにあくかれていをねぬ夜半のむめのおひかせ

〔『応円満院殿御詠歌』147

6 たのめしを頼むはいつの月日とてまちもよはらすまつ我そうき

〔1新明題3403、『応円満院殿御詠歌』1163

兵部卿幸仁親王

7 あけは又咲そふ花の色やみむ軒端の梅に雨そゝく夜半

8 かけやとす月そ更行まち侘て涙かたしく夜半の袂に〔一五丁表〕

〔2新後明1242、4部類現6977「天和三・二・廿七」

権大納言藤原光雄

9 よるも猶香こそ哀と身にしめてあかす思ふ軒の梅か、

〔4部類現642「同（天和三・二・廿七）」

10 まつかひも涙に曇るかけをのみ幾夜かみつるあり明の月

〔4部類現6978「同（天和三・二・廿七）」

正二位源通茂

一四

11 ちるや夢嵐やうつゝおもひねのさむる枕ににほふ梅か、

〔1新明題425二「さむるやうつゝ」、『中院通茂和歌集』115詞書「同（元祿

三年後西院月次夜思梅」結「梅か枝」

12 契りしを思ひやいつるとはかりにいつまてとはぬ夜をあかすらん

〔1新明題3405、『中院通茂和歌集』858詞書「同（天和）三年後西院月次待久

恋」

権中納言藤原資茂

13 咲梅の夕はへあかすみし色を忘れんとすれはにほふさよ風

〔1新明題426

14 なからへてなどおなし世に住江の待をならひのよひくもうし

〔1新明題3406二「猶同じ世に」四「松をならひの」

正二位平時量

15 軒の梅かよふ枕に色よりも香こそ哀とおもふさよかせ〔一五丁裏〕

16 とし月を堪て待身そしたひもの逢みるまてとむすふ契りに

〔4部類現6979「同（天和三・二・廿七）」

従二位藤原定淳

17 さらぬたにわすれぬものを梅かゝの夜半の枕になにかほるらん

18 年月につもるそつらき契り置て待夜空しくあくる恨は

同 実種

19 夜もすから閨のひまもる春風に色みまほしくにほふ梅か香

20 鳥かねをきくたに久し偽におもひさためまたぬ夜もかな

〔4部類現6980「同（天和三・二・廿七）」

正三位藤原実富

21 色よ香よあすいかならんとはかりに梅咲ころはうちもねられす

22 たのめつゝまつそくるしき今こんといひしはかりに長き月日を

従三位藤原意光〔一六丁表〕

23 夢絶て思ひこそやれみし花のなをあかさりしむめの色香を

24 たのめおきし夕をいつのゆふへとて月日あやなく待かさぬらん

〔1新明題 3407〕

修理権大夫藤原保春

25 あくかれてねられぬ夜半をかくそとも花はしらしな匂ふ梅か、

26 さりともとたのむもはかな契り置て待は久しきよなくのとこ

左近衛権中将藤原隆慶

27 明はまつおき出てみんかほる夜は軒端の梅の咲まさるか

28 いつ人にかくとしらせん待侘て一夜も千夜とおもふ久しき

右近衛権中将藤原定経

29 おもひねの枕の夢に咲とみてあくるまたる、宿の梅かえ

30 偽りにならひこし身もさのみはと待に幾夜をあかしきぬらん

〔二六丁表〕

〔4部類現 6981〕同〔天和三・二・廿七〕

左兵衛権佐藤原宣勝

31 明てみんな色をそおもふねやの戸に梅か、ふかき夜半の春風

32 おもへ人とはぬ月日の数そひて待も久しきゆふへくを

少納言平時方

33 おもひねの夢にはあらで面影に立枝の梅の匂ふ夜半かな

34 たのめおきてまちし夜比の数く、に今は恨のつもる年月

少納言平行豊

35 暮るまでみしをわすれぬ名残とて夜の袂も梅か香そする

36 あはしともいひはなたぬをたのみつ、待とせしまに積る年月

〔4部類現 6982〕同〔天和三・二・廿七〕

左近衛権中将藤原雅豊

37 おもひねの夢の行衛をそのま、にさむるうつ、も匂ふ梅か、

〔二七丁表〕

38 まち侘てむなしく更るかねの音をいつか逢夜の床にいとほん

〔4部類現 6983〕同〔天和三・二・廿七〕

大膳大夫菅原長義

39 よもすから雨もふるやの軒の梅あす咲そはん色そまたる、
40 別路にいつかうらみんたのめても待夜むなしき鳥のや声を

《9 天和三年三月二十一日御会》

三月廿一日

御会

款冬露

1 やまふきはいまそ金の玉の枝おるなこほすな露のさかりを

〔2 新後明 332 作者「後西院」〕4部類現 1717 作者「後西院」天和三・三・廿

一、〔水日集〕665 同〔天和二年三月二十一日〕

朝海路

2 こきはなれ此世の外の心地かな波分いつる朝日かけにも

〔4部類現 8759 作者「後西院」〕結「朝日かけかな」〔天和三・三・廿一〕、〔水

日集〕667 天和二年三月二十一日

貝丸

3 夕くれの籬は山とやまふきの花にそ露はやとりとりける

〔二七丁表〕

4 朝またき湊漕出て行舟の程も波間に遠さかりぬる

左大臣藤原基熙

5 露おもみ小萩ならでも風をまつ夕とみゆる八重の山吹

〔4部類現 1718〕同〔天和三・三・廿一〕、『応円満院殿御詠歌』346 初「露をお

もみ」

6 今朝のあさけ同し湊をいてつれと行衛いさしら波の友船

〔4部類現 8760 三〕いてつれて」同〔天和三・三・廿一〕、『応円満院殿御詠

歌』1392

兵部卿幸仁親王

7 くちなしの色にさけはや山吹のえもいひしらぬつゆの夕はへ

〔4部類現 1719〕同(天和三・三・廿二)〔

8 とまり舟一夜は友とみなと江をけさ方く漕わかれゆく

〔4部類現 8761〕三「湊舟」〔同(天和三・三・廿二)〕

権大納言藤原光雄

9 秋にみむまはさか花のうへもあれと八重さく春の山吹の露

〔4部類現 1720〕同(天和三・三・廿二)〔

10 行舟の末の湊もみるはかり浪路はれたる朝つくひかな

〔4部類現 8762〕同(天和三・三・廿二)〔

正二位源通茂

11 山吹のはなにこてふもこゝろせよはかせにたへぬ露もこそあれ

〔2新後明 338〕四「川瀬の浪に」結「春やよとむと」、4部類現 1721〔同(天和三・三・廿二)〕、〔中院通茂和歌集〕 221 詞書〔同(天和三) 年後西院月次

款冬露〕

12 うきねせしよるのとまりもおきつ舟今朝は千里の跡の白浪

〔3新題林 784〕、4部類現 8763〔同(天和三・三・廿二)〕、〔中院通茂和歌集〕 1086

詞書「天和三年後西院月次朝海路」

権中納言藤原資茂

13 春いく世つもりて淵とこれも又みはやはこやの山吹の露

〔4部類現 1722〕二「つもりて淵を」〔同(天和三・三・廿二)〕

14 名残あれや花咲磯の朝あらし追手になしてすくる舟路は

〔4部類現 8766〕「天和三」

正二位平時量

15 風ならて心つからにちる露はそれもあかすや庭のやまふき

〔4部類現 1723〕同(天和三・三・廿二)〔

16 とまり舟よるのなみ風今朝なきて漕はてんとはおもひかけすよ

〔4部類現 8767〕同(天和三)〔

従二位藤原実種

17 色香をもあたにやはみむ山ふきの枝おもけなる露のさかりは

〔4部類現 1724〕初「色香をも」〔同(天和三・三・廿二)〕

18 浦風のなきたる朝に漕いて、遠き千里の波路ゆく舟

〔4部類現 8768〕同(天和三)〔

正三位藤原実光

19 こほれても又をく露に玉はみむちらすもあれな山吹のはな

20 朝なきに行もかへるも漕いて、おなし浪路にうかふ友船

従三位藤原意光

21 置露も色にそ井出の山吹の花にみかける玉かはのさと

〔4部類現 1725〕同(天和三・三・廿二)〔

22 漕いつるいそきにさはくみなと舟此朝なきを同じ心に

〔4部類現 8769〕二「いそきはさはく」〔同(天和三・三・廿二)〕

中務大輔源資冬

23 咲にけり色もえならすむすひをくまかきの露の山ふきの花

24 和田のはらのとかにみえて浦浪のあくる湊をいつる舟人

修理権大夫藤原保春

25 暮てゆく春の名残を山吹の色に出てやしたふ露けさ

26 あらかりし浪しつまれる朝あけに湊こきいつる舟ぞ数そふ

左近衛権中将藤原隆慶

27 山吹のはなの光を猶そへてまかきにをける露のしら玉

28 海原やこの朝なきに漕いて、真帆ひく舟の波に影そふ

右近衛権中将藤原定経

29 夕間暮置そふ露もまかきよりこほれてにほふ山吹のはな

30 梶枕おなしみなとに今宵もちきりて出る今朝の友舟

〔4部類現 8770 〔天和三〕

左兵衛権佐藤原宣勝

31わけみはやこや名にたてる山吹に置いてえならぬ露の籬を

32朝なきの浪しつかなる湊江ををくれすつれていつる友舟

少納言平時方〔一九丁巻〕

33おもるともよしやはらはしきかりなる八重山吹の花の上の露

34この朝け契かはさめ又こよひ同しみなどの友舟とこそ

〔4部類現 8771 作者「時量」〕同〔天和三〕

少納言平行豊

35さなきたに八重山吹の枝たれておもきかうへに露そ置そふ

〔4部類現 1726 〕同〔天和三・三・廿二〕

36朝なく舟出はかはる浦とてもみるめは同し浪のうへかな

〔4部類現 8772 〕同〔天和三〕

大膳大夫菅原長義

37山吹の花のまかきにをく露を吹なちらしそ春の夕風

〔4部類現 1727 〕同〔天和三・三・廿二〕

38朝またき舟路はるかにかすむ日のかけもくもらぬ春の海原

〔4部類現 8773 〕同〔天和三〕

《10 天和三年三月二十一日 御当座》

同日

初花

1みそめつるこの初花よ後に又いかにさくらの色香そふとも〔二〇丁表〕

〔1新明題 733、 『応円満院殿御詠歌』 266 〕

見々

2色に香に心をそめて此ころは花より外のめうつりもなし

実富

折々

時方

3花やしる夜のまの風もいかにそと思ふあまりに手折心を

〔1新明題 784 〕

朝々

員丸

4朝風の雲吹はらふ山のはにまかはて花の色をこそみれ

〔1新明題 822 〕

夕々

長義

5夕はへの名残そ思ふ春のともあかぬまとゐの花のむしろに

〔1新明題 830 四 〕まかせて花の〕

嵐々

隆慶

6白雲とよそにみすてん色もおしたかまのみねの花の盛りを

〔1新明題 853 〕

麓々

幸仁〔二〇丁巻〕

7分入てあすは尾上のはなもみむあかす麓に今朝はくらしつ

〔1新明題 884 〕

林々

行豊

8紅葉はをたきし心に春も猶花になさけをくむ林かな

〔1新明題 904 〕

関々

9しるしらすゆきあふさかの関路とは花の木かけの名にこそ有けれ

〔1新明題 919 作者「後西院」、 『水日集』 670 初「知る知らぬずい」〕同〔天和三年三月二十一日〕

滝々

意光

10散かゝる岩ねも春はしろたへの花に色そふ布引の滝

〔1新明題 910 〕

河々

基熙

11 花や波なみやはなかとこ、ろさへうきたつかけをうつす河水

〔1新明題905、『応円満院殿御詠歌』294〕

野々

定経

12 こ、かしこのへより野へに立よりて永き日くらす花の木の本〔二二丁表〕

〔1新明題901〕

江々

13 花をのみ思ひ入江のしつ心難波の春に身をつくしつ、

〔1新明題917作者「後西院」二「思ひ入江に」三「しつこもる」、『水日集』673二「おもひいり江に」四「なにはのはるに」〔はる〕同（天和三年三月二十一日）〕

磯々

通茂

14 波風もあら磯かせのとまやかたいつを盛りと花の咲らん

〔1新明題918、3新題林1250、『中院通茂和歌集』197詞書「天和三年後西院当座御会磯花」〕

都々

光雄

15 みるにあかぬ花のみやこの花さかり春によしの、名は匂ふとも

〔1新明題920〕

花雲

実種

16 たちまひしきのふの雲の色かへて伊駒のたけそ花にうつめる

〔1新明題871〕

々雪

保春

17 雪とのみつもるたともおもからて花の香ふかき春の山道

〔1新明題880二「うつるたとも」〕

々句

宣勝〔二二丁裏〕

18 さそひきて木の下ならぬ軒端にもほひへたてぬ花の春かせ

〔1新明題868〕

々色

資冬

19 あかすみむ春の日かすに咲そひて野山も花の色になりゆく

〔1新明題860三「吹そひて」〔吹〕〕

々錦

時量

20 ちる花に青き苔地のから錦くちすもあれな春の名残に

〔1新明題861初「ちる花の」四「おらすもあれな」〕

《11 天和三年四月二十九日御月次》

四月廿九日

御月次

岡時鳥

1 相ならぬ心のこすゑたれつけていまきの岡のほと、きすはも

〔4部類現2287題「岡郭公」作者「後西院」結「郭公かも」天和三・四・廿九、「水日集」677題「岡郭公」同（天和二）年四月二十九日〕

不逢恋

2 おりくのかことくよくいひなすもた、あはしとの心ひとつは

〔4部類現3874作者「同（後西院）」結「心ひとつに」天和三・四・廿九、「水日集」679二「かごと事わけ」〔事わけ〕結「心一つぞ」〕

員丸〔二二丁裏〕

3 朝またきいまたきの岡に一声を鳴て過行時鳥かな

4 うつ、にはよしあはすとも一夜わか夢路にみせよ人の面影

左大臣藤原基瀬

5 いて我もいく夜かもねん時鳥なれよならしの岡ならはこそ

〔4部類現2288初「いてわれと」同（天和三・四・廿九）、『応円満院殿御詠歌』476初「いてわれと」四「なれにならしの」〕

6 哀わかあらは逢夜のたのみたにつらさにたへぬ命なりせは

〔4部類現6877四「つらさにたえぬ」天和三・四・廿九、『応円満院殿御詠歌』476初「いてわれと」四「なれにならしの」〕

歌』1153結「いのちなりけり」

兵部卿幸仁親王

7時鳥五月まつまは岡の名のしのひにもらす音をやなくらん

〔4部類現 2289〕同(天和三・四・廿九)〔

8いつこえてかくとしらせん逢坂の関のこなたにまよふ恋路は

〔4部類現 6879〕かくしらせなん〕天和三・四・十九)〔

権大納言藤原光雄

9鳴声を忍ひの岡のほと、きすきたかならぬも哀とそきく

〔4部類現 2290〕忍ふの岡の〕同(天和三・四・廿九)〔

10つれもなき人のいわ木にいかさまにいひしほりてかなひくをもみむ

(三丁裏)

正二位通茂

11過にけりならしの岡の時鳥たかことつてもき、わかぬまに

〔4部類現 2291〕同(天和三・四・廿九)〕、『中院通茂和歌集』283詞書「天和三年後西院月次岡郭公」

12あすか川逢せにかはる契りあらはしつむおもひの淵もたのまん

〔4部類現 6884〕天和三・四・十九)〕、『中院通茂和歌集』802詞書「天和三年後西院月次不逢恋」

権中納言藤原資茂

13名残あれやねての朝氣に音つれてをかのかやかたを行時鳥

〔4部類現 2292〕四)をのかやかたを〕同(天和三・四・廿九)〔

14あはぬ身のつらさより先むくひある世のことはりそ人になしき

〔4部類現 6900〕天和三・四・十九)〔

正二位平時量

15時鳥いつる岡辺の夏草にしけさくらへむ声をきかまし

〔4部類現 2293〕いつか岡への〕同(天和三・四・廿九)〔

16ひたふるにあはしといは、中くうらみの数もかくはまさらし

〔4部類現 6901〕同(天和三・四・十九)〔

従二位藤原実種

17きくからに声はふりせぬほと、きす今きの岡の今もむかしも

〔4部類現 2294〕同(天和三・四・廿九)〔

18つれなさを何にたとへむかたし貝あはて二見の恨のみかは

〔4部類現 6902〕同(天和三・四・十九)〔

正三位藤原実富

19ほと、きすまた忍ひねをまたきよりならしの岡になれてきかはや

〔4部類現 2295〕同(天和三・四・廿九)〔

20うきふしにたえてもおしめ末つゐに逢事あらはかへむいのちは

従三位藤原意光

21時鳥た、一声を夕つくよさすや岡へのまつに過すな

〔4部類現 2296〕同(天和三・四・廿九)〔

22あひままくほしの一よの契りたにたのめぬ中はうらやまれぬる

〔4部類現 6903〕同(天和三・四・十九)〔

修理権大夫藤原保春

23若みとりしける岡への木の間より声はなやかになくほと、きす

24いつか我あひみて後にかたらましようき年月のつもる思ひを

左近衛権中将藤原隆慶 (三丁裏)

25けふいくか待かひありて忍ひねをしのひの岡にきくほと、きす

26ほしあへぬたくひとみるもうしや人にあはての浦の海士の袂を

右近衛権中将定経

27名にしおふ忍ひの岡の忍ひねはもらすかひなきほと、きすかな

28あふ坂の関をはいつか越てみむうき年月を中にへたて、

左近衛権佐藤原宣勝

29 初声をきくよりこゝにゆきかへりならしの岡に鳴ほとゝきす
30 たのめてもよりあふことはかた糸のとけぬ心におもひみたれて

少納言平時方

31 待われに初音きかせよ時鳥たれに忍ひの岡へなりとも

32 なけきあまり今は中く逢夜をもたのましと思ふそれも悲しき〔二四丁表〕

少納言平行豊

33 よひくゝに岡への月は待いてつなをまたるゝはほとゝきすかな

34 うしや人行末まではかけすともせめて一夜の契りたにあれ

〔4部類現6923初「うし人よ」

左近衛権中将藤原雅豊

35 此比は声もおしまて旅人の往来の岡になくほとゝきす

〔4部類現2297「同(天和三・四・廿九)」

36 いつの世か心もとけむ下ひものむすほゝれたる中の契りは

〔4部類現6924二「心もとけぬ」四「むすほふれたる」同(天和三・四・廿九)」

大膳大夫菅原長義

37 たかりもまつらむ物をほとゝきすこの岡ゆへに初音をそなく

38 逢事はたのむもはかな年月の人のつらさに思ひよはらて

〔4部類現6925初「あふ事を」同(天和三・四・十九)」

《12 天和三年四月二十九日 御当座》

同日

御当座

首夏風

幸仁〔二四丁裏〕

1 いとはやも朝風すゝし夏衣うすき袂にたちかへしより

〔2 新後明361結「たちかへしても」、4部類現1997結「たちかへしつ、」天和三・四・廿五〕

和

垣卯花

員丸

2 きえかての垣ねの雪のおもかけや今朝白妙に咲るうの花

〔4部類現2104「天和三・四・廿九」

暁郭公

長義

3 此比のまたれくし初声を明かたちかくきくほとゝきす

早苗多

資茂

4 みてそおもふ千町のさなへめはるにうへし緑の茂き恵を

〔4部類現2397「天和三・四・廿九」

柚五月雨

通茂

5 ことかよふ道もやたえむ五月雨の雲にみなきるにふの柚川

〔3 新題林2324、『中院通茂和歌集』313詞書「天和三年後西院当座柚五月雨」

夜鶺鴒

行豊

6 夏箕川月になるよもしはしとてこの山かけにう舟さすらん〔二五丁表〕

〔4部類現2813題「夜鶺鴒川」天和三・四・廿九」

夏月涼

保春

7 関の戸をさゝて更行夏のよの月をいれたる風のすゝしき

蚊遣火

雅豊

8 たえまなくたつる煙に蚊の声はよそに軒端を遠さかりゆく

〔4部類現2939「天和三・四・廿九」

窓前螢

時方

9 窓近き竹の葉かくれみえそめし螢そくれて光そひゆく

〔4部類現2910三「みえ初て」天和三・四・廿九」

晩夏蟬

意光

10 この夕風も秋ちかくならの葉の木陰すゝしき蟬の諸声

〔4部類現3080「同(天和)三・四・廿九」

寄枕恋

11 かきくらし涙のふるき枕して何くれかくれおもひいてつゝ、

〔4部類現⁸³²²作者「後西院」〕「天和三・四・廿九」、『水日集』681「同（天和）二年四月二十九日」

々琴々

宣勝（二五丁巻）

12しれかしなつれなき中にたえはてぬ玉の緒ことの音にたてすとも

〔2新後明¹⁵⁴²題「寄箏恋」、4部類現⁸⁴⁰⁰題「寄箏恋」〕「天和三・四・廿九」

々帯々

実種

13佛は身をはなれすそかけ帯のかけておもはぬ時しなれば

〔4部類現⁸³⁷⁵二〕「身をはなれすよ」〕「天和三・四・廿九」

々弓々

基熙

14押かへしかへしても又我心ま弓つき弓つきぬうらみそ

〔2新後明¹⁵⁴³、4部類現⁸⁴⁰¹結「つきぬ恨を」〕「同（天和三・四・廿九）」、『応円満院殿御詠歌』¹³³⁹」

々車々

実富

15いつまてかあはぬなけきをつみそへん力車をつよき心に

〔4部類現⁸⁴²¹〕「天和三・四・廿九」

遠村竹

基熙

16山本の朝けの煙立さらてのこるやなひく竹の一むら

〔4部類現⁹²⁵⁷三〕「立そえて」〕「元禄三・四・廿九」、『応円満院殿御詠歌』¹⁴⁵²」

河眺望

定経

17此あさけうちの河せの末晴て浪間にみゆる遠の柴舟（二六丁巻）

旅泊雨

隆慶

18よるの雨にうきねの枕おとろきて夢に都の名残悲しき

〔2新後明¹⁸⁶⁷、4部類現⁹⁰⁵³〕「天和三・四・廿九」

古寺櫓

19うはそくか一夏こもり古寺にしきみの花のつみはのこらし

〔3新題林⁷⁹⁵⁵作者「（後西院）」二〕「一夏こもる」、『水日集』684二〕「一度こ

もれる」

社頭榊

時量

20かしこくも氏人まもる宮居こそ立さかへよと榊さすらめ

〔4部類現⁹⁸⁶⁹〕「天和三・四・廿九」

《13天和三年五月十六日御当座》

五月十六日

御当座

朝鶯

員丸

1谷の戸を出るうくひす春きぬとけさめつらしくつくる初こゑ

雲雀

幸仁

2夕まくれ野への芝生に床しめてなくや雲雀の声のま近き（二六丁巻）

田蛙

意光

3せきいる、苗代水にとろえて小田の蛙の声しきるなり

照射

4益雄か待もつらしや松ともしに鹿のよるの契りを

〔『水日集』695〕「天和二年五月十三日」

夜虫

保春

5みたれとふ光やいつちゆくほたるよふかき露の草にやとらて

〔4部類現²⁸³³結「草にやとして」〕「天和三・五・十六」

野虫

光雄

6露と、もにみたれてそなく此夕花の、むしのこゑもちくさに

〔4部類現⁴⁰⁰⁶四〕「花の、虫も」〕「天和三・五・十六」

初雁

長義

7秋風の雲霧はらふ峰こえてけさそみやこの初雁のこゑ

夕鶉

定淳（二七丁巻）

8うつらなく秋も末の、夕風にいと、あはれや深草のさと

千鳥

実富

9 行かへりこゑもさためす鳴ちとりなみのたちるに友まよふらん

網代

資冬

10 袖さむみひをのよるく冬川の瀬々のよとみに網代もる身は

〔4部類現 5921 天和三・五・十六〕

忍恋

隆慶

11 忍ひぬる心も今やよはるらしつゝむたもとにあまる涙は

見恋

行豊

12 今そしる佛さらす身にそへはみしは聞しにまさる思ひと

祈恋

時方

13 わか方にしるしもみえずあはしとの人の祈は神やうくらん

〔二七丁裏〕

別恋

実種

14 までしはしまた明やらす月かけそ人めにいそく別なりとも

顕恋

宣勝

15 よるへさへいまは浪まにあらはれてうきたる舟のよそこにこかる、

嶺椿

16 玉椿かはらぬ色も夏きては青葉若葉そみねにさやけき

〔4部類現 9459 作者「後西院」天和三・五・十六〕、『水日集』697 同（天和二年五月十三日）

澗楨

時量

17 谷かくれ檜原のみとりたつ楨のその色としもわかぬ涼しさ

〔2新後明 1706、4部類現 9470 天和三・五・十六〕

杜柏

通茂

18 枝かはすかえてや秋にわきてみむしけるは同じ杜のかしは木

〔4部類現 9466 四「おなし若葉の」天和三・五・十六〕

門杉

基熙

〔二八丁裏〕

19 入てみむさそふ心のちりもなきこけちの杉の過かての門

〔4部類現 9467 同（天和）三・四・十六〕、『応円満院殿御詠歌』1487

礧松

雅豊

20 花かよ十かへりならてあら礧の松のしつえにかゝる白浪

〔2新後明 1696、4部類現 9388 二「十かへりなして」元禄三・四・六〕

《14 天和三年五月十六日》

五月十六日

暁水鶏

1 さなきたにぬる間も夏の天の戸をたゝく水鶏はこれあけよとや

〔2新後明 447 作者「後西院」結「こ、明よとや」、4部類現 2612 作者「後西院」結「こ、明よとや」天和三・五・十六〕、『水日集』693 〔改作〕

山家橋

2 山水のすむとはかりの丸木橋扱もうき世にかよふ道かも

〔3新題林 8224 作者「後西院」結「かよふ道かな」、『水日集』690 同（天和二年五月十三日）〕

3 とふ人とたれおとろかむ楨の戸をたゝく水鶏のあかつきの声

〔4部類現 9119 同（天和三・五・十六）〕、『応円満院殿御詠歌』1426

貝丸

4 山かけや庵のかよひちたえくゝにむす苔青き谷のかけはし

〔二八丁裏〕

左大臣藤原基熙

5 月かけのかたふくしたふ楨の戸をあけよといかてたゝく水鶏に

6 おりくゝに木こりやかよふ山ふかきいほよりおくの道のしは楨

〔4部類現 9119 同（天和三・五・十六）〕、『応円満院殿御詠歌』1426

兵部卿幸仁親王

7 やとりかす人もなしやと音たて、あかつきまでたゝく水鶏は

〔4部類現 2613 初「やとりかへす」〔ナシ〕同（天和三・五・十六）〕

8すむ人のあるかなきかのこゝろとやわたすもほそき山のかけ橋

〔4部類現9120〕同〔天和三・五・十六〕

権大納言藤原光雄

9みしか夜のあけかたちかき槿の戸をたゝくときくやくるな鳴こゑ

〔4部類現2614〕同〔天和三・五・十六〕

10これよりもうき世をわたるあやうさをすむ身や思ふそはのかけ橋

正二位源通茂

11あけよとや水鶏はたゝく更るよの影たにつらき月のとほそを〔二九丁表〕

〔2新後明448、4部類現2615〕同〔天和三・五・十六〕、『中院通茂和歌集』319

詞書「天和三年後西院月次暁水鶏」

12出しとはちはぬ橋もとしふかき苔にくちゆく谷のかくれ家

〔3新題林8225三〕年ふりて

権中納言藤原資茂

13あかつきやはや起いて、つかへよと閨の戸たゝくくぬなるらん

〔4部類現2616初〕「暁や」〔同〔天和三・五・十六〕〕

14庵しめてひろふ爪木のたよりもたれかけはしののこる山かけ

〔4部類現9122〕同〔天和三・五・十六〕

正二位平時量

15夜たゝなく水鶏ならずは明るまでたゝくにあげぬ門はあらしを

〔4部類現2617〕同〔天和三・五・十六〕

16ありとたにしらし深山のひとつはしひとりふたりの庵の通ひ路

従二位藤原定序

17そことなくたゝく水鶏にみし夢はさそはれはてゝあくるしのゝめ

18朝夕にかよひなれても山里のくちてこけむすはしはあやうき

従二位藤原実種〔二九丁裏〕

19あはむとは人に契らぬあかつきを此戸あけよとたゝくくゝみなか

20人とはむしるへとならばはしもいま山のかひなきかくれ家にこそ

〔4部類現9123〕同〔天和三・五・十六〕

正三位藤原実富

21あけよとてたゝくや水鶏とふ人は思ひもかけすねやのあかつき

22このまゝに捨なはくちね山ふかみ往来たえたる谷の柴はし

従三位藤原意光

23たれみよと暁かけて月の下の門を水鶏のなとたゝくらむ

〔4部類現2619〕同〔天和三・五・十六〕

24くちねたゝ誰かはとはむ山住にわたすかひなき谷の柴はし

〔4部類現9124〕同〔天和三・五・十六〕

中務大輔源資冬

25明るまで夢もみせしとねやの戸を夜半の水鶏のないたゝくらん

26とふ人はおもひもかけす庵しめてあらしのわたる山のかげはし〔三〇丁表〕

修理権大夫藤原保春

27心なき水鶏とそきく新枕この戸あけよとたゝくあかつき

28とはし世に故郷人は山すみのこゝろほそくもかゝるかけはし

左近衛権中将藤原隆慶

29槿の戸をたゝく水鶏はあり明の月に夢みる人をいさめて

30山人のためにはあらし奥ふかくたれ住ならんわたす柴はし

左兵衛権佐藤原宣勝

31天の戸の明るまでとやこゑたえすたゝく水鶏にたれか夢みん

32たれとはむかけてかひなく山人の柴おりくゝの谷の岩はし

少納言平時方

33またあけぬ夜すからたゝく水鶏かな槿の板戸のひましらむまで〔三〇丁裏〕

34五月雨は谷の岩はし水こえてとはれむ道そいとゝたえぬる

同行豊

35人はよもとはし我門明かたの月にた、くや水鶏なるらん

〔4部類現2620〕〔同(天和三・五・十六)〕

36我ためは出へくもあらず人はこすかけて何そは道のしははし

〔4部類現9125三〕〔人わたす^{〔註〕}〕〔同(天和三・五・十六)〕

左近衛権中将藤原雅豊

37いかなれは明る程なき槇の戸を暁かけてた、く水鶏そ

38山住をとひこし友も跡たえてむす苔ふかき谷の岩はし

大膳大夫藤原長義

39水鶏こそ此戸あけよとた、くらめ我待人とはぬあかつき

〔4部類現2621〕〔同(天和三・五・十六)〕

40よをいとひ入深山辺のすみかにはかけしもほそき谷の梯^{〔三二丁表〕}

《15天和三年閏五月十一日御当座》

後五月十一日

御当座

夏雲

基熙

1いかに又あつさをそへてゐる雲のかさなる峰は風もはらはて

〔『応円満院殿御詠歌』584〕

々風

保春

2まちとりて袖のあつさそ夏衣ひとへにおもふ風のたよりを

々雨

宣勝

3みるうちに村雲きほひ降音の軒にはけしき夕立の雨

々露

実富

4みるからに涼しさあかぬ心さへむすひとめたるなつ春^{〔草敷〕}の露

々塵

時量

5手にならす扇は風のすへもせし夏そ火桶はちりひちちの山^{〔三二丁裏〕}

々朝

定経

6陰ふかく生そふ庭のわか竹にかよふ朝けの風の涼しさ

々夕

員丸

7こぬ秋の風もかよへる夕まくれ御もくさは露もみたれて

々暁

意光

8夢はいさねやの枕もとりあへぬこゑに明ゆくよはのみしかさ

々夜

雅豊

9うた、ねの端居の枕夢もみすはかなく明るみしかよの空

々昼

10にしひかしな、めにはあらぬ日の影そあつさも今を一盛りなる

〔4部類現3223作者〕〔後西院〕〔天和三・五・十六〕、『水日集』704二〔なのみにはあらぬ〕〔天和二年五月十六日〕

々木

時方^{〔三二丁表〕}

11舟つなく岸ねしけりて蟬のなく柏の陰そ風も涼しき

々草

通茂

12花さかは鹿なく秋の野ともなれ庭もまかきも茂る夏草

々竹

長義

13夕露の玉もみたれて打なひく風も涼しき庭のわか竹

々鳥

定淳

14若苗の水のみとりに色そえてよそめす、しくたてる白鷺

々獸

15明るまは夏のにしける草薙露にふすゐのかるもかく床

〔4部類現3252作者〕〔後西院〕〔天和三・五・十六〕、『水日集』706〔同(天和三年五月十六日)〕

々舟

資冬

16か、り火もや、かけうすく鶺鴒かい舟さす間も夏の明かたの空^{〔三二丁裏〕}

々車

実種

17 所せく神まつりする夏の日はものみ車そたてつゝけたる

々恋

幸仁

18 みてもしれ思ひをいは、鳴蟬もゆる螢も身のたくひそと

々旅

資茂

19 駒とめてこゝに一夜と夕風のやとりすゝしき松のしたかけ

々祝

隆慶

20 あふくそよ夏の草木の茂れるをしけき恵のためしにはして

《16 天和三年閏五月十一日兼日》

後五月十一日

兼日

夏篠田杜

1 おりくをいかにしたの杜の風木すゑの夏になひく容儀も〔三三丁表〕

『水日集』699題「篠田杜」「同（天和二）年後五月十一日」結「靡くすがたは」

恋鳴海浦

2 魂魄のかよふとならば夢にたに人に鳴海のうらなくも願

『4部類現⁷⁵作者「後西院」「御集」、『水日集』702題「鳴海浦」「同（天和二）年五月十六日」

員丸

3 暮ふかみしのたの杜の下草に露とみたれてほたるとひかふ

4 いかにせんなるみの浦による浪をかけてたもとそかはく間もなき

左大臣藤原基熙

5 なげやなけしのたの杜のほとゝきす千枝に千声の数をたくへて

『応円満院殿御詠歌』594

6 うきめこそ袖によりくれ逢事ははるかなるみの浦路へたてゝ

『応円満院殿御詠歌』1272初「うき名こそ」

兵部卿幸仁親王

7 分ゆけは涼しさあかす白露のむすふしのたの杜のしたくさ

8 ひかたくも袖に鳴海のうらみかるみるめはからてこふる涙に〔三三丁裏〕

権大納言藤原経慶

9 数くゝに露もほたるもみたれあひてしのたの杜の木陰涼しき

10 人心よそになるみのうら浪はみるめかひなく立へたてぬる

同 光雄

11 秋よりも陰の下草露しけししのたの杜は千枝の雫に

12 契りしも跡なき浪にゆく舟のよそに鳴海の浦みやはなき

正二位源通茂

13 露とゝもにちるや螢も千枝のかすしのたの杜のしのに乱て

『中院通茂和歌集』356詞書「天和三年後西院月次夏篠田杜」

権中納言藤原資茂

15 ほとゝきすしのたの杜の忍ひねも今は千声や枝にあらそふ〔三四丁表〕

16 こかるゝも又ためしなき世かたりにわれや鳴海の浦の釣舟

正二位平時量

17 すゝむ也蟬なきくたし螢とふしのたの杜の木かけならして

18 うしや我にあた浪かけてなけゝとの契なるみの浦としれとは

従二位藤原定淳

19 雨すくるしのたの杜の夕風に千枝の下露ちるも涼しき

20 しらせはやよそになるみのうらみには海士の捨衣しほれまさると

同 実種

21 立そよる木陰涼しくいつみなるしのたの杜に夏をわすれて

22 くらへては人の心そさためなき鳴海の浦の塩のみちひに

正三位藤原実富〔三四丁裏〕

23夕立の名残をしはしのこすらんしのたの杜の千枝のしたつゆ

24逢ことははるかなるみのうらみしとうきとし浪を中にかさねて

従三位藤原意光

25くる、夜はしのたの杜の千枝のかせはたるも露もともに乱て

26なみか、る袖のうらみにあさくやは契りしことはあはすなるみに

中務大輔資冬

27あさきりをよそにへたて、夕す、みなる、しのたのもりの下かくれ

28逢ことはなみにこかれて行末も哀なるみのうらのすて舟

修理権大夫藤原保春

29立ならずしのたの杜にまちいて、木の下かせそ月に涼しき

30逢事は遠くなるみのうら浪にあまのつり舟こかれてそゆく〔三五丁表〕

左近衛権中将藤原隆慶

31夕立の名残す、しく露ちりてしける篠田の杜の夏くさ

32あま衣ほしこそ侘れ人こ、ろよそになるみのうらみかさねて

右近衛権中将藤原定経

33なく蟬の声も涼しき夕間暮あかぬしのたの杜の下風

34おもはすよ行すゑかけしことの葉もよそになるみの恨せんとは

少納言平時方

35なく蟬もまたき秋をやいそくらんしのたの杜のしのひくゝに

36歎くそよ契りかひなく人はよとなるみの浦の浪とたつ名を

同 平行豊

37かへるさはさやけき月もいつみなるしのたの杜に夕す、みして〔三五丁裏〕

38尋はやみるめかるてふ便あらははるかなるみの海路なりとも

左近衛権中将藤原雅豊

39夕立の名残もさらにす、しきやしのたの杜の千枝のした露

40行末のよるへもしらすなるみかた身はうき舟のよそにこかれて

大膳大夫菅原長義

41あさきりをへたて、しはし立ならずしのたの杜の木かけ涼しき

42いかにせんよそになるみのうらみても哀かひなき人の心を

《17天和三年六月御月次》

六月

夏草露

御月次

1茂れ草やとりとなれる夕くれの露そす、しまねく玉なる

〔2新後明495、4部類現2707題「夏艸露」作者「後西院」天和三・六・十二、

『水日集』715四「同（天和三年六月二十五日）」「露ぞすずしき」結「まねく玉なる」〔かな（イ）〕

寄水雑〔三六丁表〕

2舟をうかへ筏をなかし行水のこれも此世をわたるみちかな

〔4部類現10182作者「後西院」天和三・六・廿五、』水日集』716「同（天和三年六月二十五日）」

貝丸

3茂りゆく庭の夏草ふくかけにこほれて露の玉そみたる、

4谷水に心のちりもあらふらしうき世をよその山の住居は

左大臣藤原基熙

5花はまた夏の、小萩むらす、き今たに露の玉ことにして

〔4部類現2708「同（天和三・六・廿五）」、『応円満院殿御詠歌』531

6明くれにちりかきはらふやり水の清きならふこ、ろともかな

〔4部類現10183「同（天和三・六・廿五）」、『応円満院殿御詠歌』1644

兵部卿幸仁親王

7このま、にちらすもあれな消ぬ間は露を花なる庭の夏草

8方〱にせきわかちてもすなほなる水の心そみえてなかる、
〔4部類現 2709〕同〔天和三・六・廿五〕

〔4部類現 10184〕同〔天和三・六・廿五〕

権大納言藤原経慶〔三六丁巻〕

9ぬきとめぬ玉とみたれて夏草の葉末す、しき露の夕かせ

10石はしる音さへ清き山水のなかくみしる栖もとめむ

権中納言藤原資茂

11秋にみん千種より先色にをくさゆりあちさいなてしこの露

〔4部類現 2710〕同〔天和三・六・廿五〕

12もとよりのかたちとはみし朝手あらふたらいの水のまとかなりとも

正二位平時量

13咲出ん花の秋ちかうなるま、にあつさきえゆく草の上の露

〔4部類現 2711〕同〔天和三・六・廿五〕

14なかれての世々の鑑そかしこきかうつす硯の水くきの跡

従二位藤原定淳

15しけりあふ草の葉山を分ゆけは袖にす、しく露も乱れて

16うらやまし水を砌にせき入て心もきよくすめる住家は〔三七丁巻〕

従二位藤原実権

17花にみむ野面の秋に先たちて露もはへある庭の夏草

〔4部類現 2712〕同〔天和三・六・廿五〕

18砌なる池にのそめる松か枝のかけうつす水も千とせとやすむ

正三位藤原実富

19秋またぬ花もやありとわけてみんしける草葉の露の嵯峨野を

20おもへた、まなふる道も行川のためむ時なき水のなかれを

従三位藤原意光

21ちらすなよまた一花もなつくさのしける垣ねはせめて露たに

22山水のた、一すちにすむ人はきよき心のかひもこそあれ
〔4部類現 2713〕同〔天和三・六・廿五〕

修理権大夫藤原保春

23夕立の名残す、しくちる露は玉をうへしとみゆる草むら〔三七丁巻〕

〔4部類現 2714〕同〔天和三・六・廿五〕

24我こ、ろにこりをあらふ水もかな池のか、みにかけはうつれと

左近衛権中将藤原隆慶

25夏ふかく茂る草葉の露のうへに秋の花野をおもひこそやれ

26かしこしな芝のみきりとせき入て水をたのしむ君かこ、ろは

右近衛権中将定経

27置露もす、しき庭の夏草に秋みん花の色そまたる、

28水上のきよきなかれをせき入て岩ね涼しき庭のやり水

左兵衛権佐藤原宣勝

29ぬきとめぬ玉とみたれてちるもよし夏の、草の露のゆふかせ

30言の葉の道にうつして君かみむ山下水のたえぬなかれを

少納言平時方〔三八丁巻〕

31みたれちれ夕露す、し咲花は夏の、草よ風のまに〱

32君に臣のつかふか道におもへた、ひるよるわかぬ水のなかれを

少納言行豊

33咲花は夏の、草のいまをこそ中〱露のさかりとはみめ

〔4部類現 2715〕同〔天和三・六・廿五〕

34山水のたえすもおもへ浅きよりつもりてふかき道のまなひそ

左近衛権中将藤原雅豊

35秋またて先咲出る花もあれな露のはへなき草のまかきに

〔4部類現 2716〕同〔天和三・六・廿五〕

36くみてしる人しもあれな行水のた、一すしにすめるこ、ろを

大膳大夫菅原長義

37 吹はらふ風のあとよりしら露のむすひかへたる野辺の夏草

〔4部類現 2717〕同〔天和三・六・廿五〕

38 しはしたによとむともなく朝夕になかれてたえぬ水の音かな

〔三八丁裏〕

《18 天和三年七月二十七日 御当座》

七月廿七日

御当座

初秋月

1 秋の来てなにもこのそとはかりのこや初入と三日月のかけ

『水日集』719「同〔天和三〕年七月二十七日」二句「千千にものこそ」

夕萩風

幸仁

2 音たて、やとりとなれる夕風に露はむすひもとめぬ萩はら

朝萩露

員丸

3 萩か枝にたちみたれたる白露の玉とか、やく朝日かけかな

籬中虫

長義

4 誰とへと契り松むし夜もすからまかきのうちにひとり鳴らん

夜聞鹿

保春

5 よもすからねられぬ友ときくもうし鹿なく野へに草枕して

〔三九丁表〕

寄菴恋

定淳

6 しきわひぬあはれとし月ひとりねの床の小菴ちりもはらはて

々琴々

基熙

7 おもふことの音にあらはる、ためしゆへうきすすきひとてえこそならさ

ね

〔『応円満院殿御詠歌』 1338〕

々玉々

時量

8 しのふるももろき涙を人とは、たかぬきみたる玉とこたへん

々糸々

雅豊

9 いつきてかよりあふことはかた糸のうきふししけくむすほ、るらん

々帯々

資茂

10 かたむすひとけぬ心をいかさまにしつはた帯の中にたのまむ

関路雲

時方〔三九丁裏〕

11 越わひぬ行衛もしらす白雲の立かさなれる関のとさしは

遠村鶏

宣勝

12 かすかにも夕つけ鳥そきこえきぬ月はそなたに遠の一むら

田家雨

隆慶

13 小山田の路のゆき、も絶はて、雨しつかなる庵のさひしき

旅泊夢

行豊

14 夢もやはみつの泊のうき枕松かせあらしなみのひ、きに

名所松

実種

15 よせかへる浪にそ馴て陰たかくいやさかゆへき和哥のうら松

《19 天和三年七月二十七日》

七月廿七日

野径薄

〔四〇丁表〕

1 玉と散野への尾花か袖の露をそてにうつして分るほそみち

〔4部類現 3796〕作者「後西院」天和三・七・廿七、『水日集』717「同〔天和三〕年七月二十七日」

三）年七月二十七日」

人伝恋

2 いふかしないかにうちいて、我思ひことの葉たらすまねひなきはと

〔2新後明 1163〕作者「後西院」四「ことのは絶す」結「まねひなきはと」、

4部類現 6679〕作者「後西院」初「いふかしな」二「いかに打いて、」結「ま

ねひなきはや」天和三・七・廿七、『水日集』718「同〔天和三〕年七月

二十七日「初「伝へしも」二「うしろめたしや」結「まねびなさばと」

貝丸

3分てゆく人もまれなる秋の野に誰をかまねくしの、小す、き
4いと、しく思ひそまさる我心人つてなからしらせそめては

左大臣藤原基熙

5わくる野の道さまたけよ花す、きまねけはさすか過かてにして

〔4部類現 3797〕同（天和三・七・廿七）、「応円満院殿御詠歌」684

6ことよきをつらきいらへによしかへん人つてならぬ中とおもは、

〔4部類現 6680初〕「ことよきに」二「つらきいらへを」同（天和三・七・廿七）、「応円満院殿御詠歌」1123「ことよきに」

兵部卿幸仁親王

7露わけて誰とへとてか秋の野にゆくもかへるもまねく薄そ（四〇丁裏）

〔4部類現 3798〕同（天和三・七・廿七）

8おなし色のつらさなりとも人つてのことはならぬ一こともかな

〔2新後明 1164結〕「人のこと哉」、4部類現 6681結「人のこと哉」（ひとこととも）同（天和三・七・廿七）

正二位平時量

9分かへる野の初尾花かりねしてあかぬ月かけまたきてもみむ

〔4部類現 3799〕同（天和三・七・廿七）

10おほつかないかなるすしにいひなさむつてやることも人のいらへも

従二位藤原定淳

11風ふけはゆき、の人を化野のあたにもまねく花す、きかな

12なをさりに人やつたへんせきかねてつ、むにあまる袖の涙も

従二位藤原実種

13わけゆかん末野の薄ほに出てまねくを道のしるへにはして

〔4部類現 3800二〕「ま、の薄の」同（天和三・七・廿七）

14いひ出てあまりことよきいらへにはたのむつかひそうたかはれぬる

〔4部類現 6682結〕「うたかはれる」同（天和三・七・廿七）

修理権大夫藤原保春（四二丁表）

15分わひぬ尾花か袖のまねかきはありともしらし野への通ひ路

16人にのみつたえてき、し一言をたのむ契りのゆくゑはかなき

左近衛権中将藤原隆慶

17行くれぬ野への草葉のかり枕尾花か袖をかたしきにして

18つれなきは尋常なるを人伝はいかにいひしとらむるもうし

右近衛権中将藤原定経

19うちなひく野への尾花の夕風に分行袖も露そみたる、

20さそとたに人はしらしな伝やることのはよりもふかき思ひを

少納言平時方

21心をはいつれによせむ野への暮まねくおはな袖をあまたに

22なさけなきいらへなりともなくさめて我には人の語りなしてよ（四二丁裏）

〔4部類現 6683〕同（天和三・七・廿七）

少納言平行豊

23露けさは尾花か袖に我袖よいつれかいつれ野への通ひ路

〔4部類現 3801三〕「我袖に」同（天和三・七・廿七）

24我心もれはと思ひかへしても人つてならていかてしらせん

〔4部類現 6684〕同（天和三・七・廿七）

左近衛権中将藤原雅豊

25たれを猶まねく尾花か袖ならむ往来もたえてくる、野原に

〔4部類現 3802初〕「誰袖を」同（天和三・七・廿七）

26なをさりにかたりなすなよわれたにも言葉残る下の思ひを

〔4部類現 6685〕同（天和三・七・廿七）

大膳大夫藤原長義

27夕間暮野への小す、き吹風になとか往来の人まねくらん

〔4部類現 3803〕同〔天和三・七・廿七〕

28うしやた、人つてなれは我思ふ心のほとをいひはつくさし

〔4部類現 6686〕同〔天和三・七・廿七〕

《20天和三年八月二十九日御月次》

八月廿九日

御月次

月前松〔四二丁表〕

1嶺におふる松そ久しきいて、しも梢に月のすみのほるほと

〔4部類現⁴⁶⁷⁴作者「後西院」〕天和三・八・廿九、『水日集』721〔天和三年八月二十九日〕

月前竹

2こほる、もつもるも雪は月にふく竹のうら葉の風のまにく

〔4部類現⁴⁶⁷⁹作者「後西院」〕天和三・八・廿九、『水日集』722

員丸

3秋にそふ光とやみむ庭のおもの玉松か枝をみかく月かけ

4窓ちかくなひきあひたる竹のはに霜かとまかふ月のさやけさ

左大臣藤原基瀬

5あやなくも更行月か空は猶雲もあらしの松の木かけに

〔4部類現⁴⁶⁷⁵同〔天和三・八・廿九〕〕、『応円満院殿御詠歌』790

6こや秋をみせもきかせも月白く風清き夜の窓の村竹

〔『応円満院殿御詠歌』789〕

兵部卿幸仁親王

7一本の松かけならてはる、よの月はくまなきしかのから崎〔四二丁裏〕

〔4部類現⁴⁶⁷⁶二「松かけなくて」〕同〔天和三・八・廿九〕

8呉竹の夜半のあらしは音たえてはわけの月のかけそしつけき

〔4部類現 4680〕同〔天和三・八・廿九〕

正二位源通茂

9ふくるよの松にしくる、秋風も袖こそぬらせ月はくもらす

〔4部類現⁴⁶⁷⁷同〔天和三・八・廿九〕〕、『中院通茂和歌集』532〔月前松〕

10とへかしな竹一村のおくのと世をへたてたる月はいかにと

〔4部類現⁴⁶⁸¹二「竹の一村」〕同〔天和三・八・廿九〕、『中院通茂和歌集』531詞書〔天和三年後西院月次月前竹〕

正二位平時量

11霜雪にまかへる月の影にたに松はさかふる色をふかめて

12心なくしけれ竹の葉山かなそなたにしとふ月の行衛に

従二位藤原実種

13雲は皆はらふ風にも残りけり月のくまなる松そわりなき

14なひきふす末葉に白き月影を雪折しらぬ竹かとそみる

〔4部類現⁴⁶⁸²同〔天和三・八・廿九〕〕

正三位藤原実富〔四三丁表〕

15風ふけはくもりみはれみ山松のひまもる月そ影さためなき

16小枝もか月のためとや吹わけて竹の葉ならす窓の秋風

修理大夫藤原保春〔権脱〕

17色そ、ふ松も秋にはくもりなき月の枕に枝をかはして

18おくふかくかこふ砌のくれ竹のよ、にもりくる月そえならぬ

左兵衛権佐藤原宣勝

19常盤なる松の木の間をもる影もいまひとしほの月の秋かな

20呉竹の窓うつつをとほ雨に、て葉分の月そはれ間みせける

少納言平時方

21一とをり月にはれ行村雨を軒はにのこす松風のこと

22呉竹のよなかき空もなかしとは思ひそはてぬ月のさやけさ〔四三丁裏〕

少納言平行豊

23 雲はる、よはも軒端の松風に月は木のまの影さためなき
24 なよ竹のよななき窓に月更て霜かあらぬか小枝もるかけ

左近衛権中将藤原雅豊

25 うつし植した、われからの軒の松木の間の月のこゝろつくしも
26 千々の秋もあかすそみまし色かへぬ竹の葉分て出る月かけ

《21 天和三年八月二十九日 御当座》

八月廿九日

御当座

秋月

幸仁

1 百草の花さへあかぬませの内の露に色そふ秋の月影

「2 新後明 719、4 部類現 4314 「ませの内の」「天和三・八・廿九」

々々

宣勝

2 たくひなき光をそへて秋といふ名にもくもらぬ夜半の月かけ〔四四丁表〕

「4 部類現 4315 「同（天和三・八・廿九）」

々々

雅豊

3 雲霧は千里に晴て秋風を光になして月そさやけき

「2 新後明 720 「千里にはる、」、4 部類現 4316 「千里にはる、」「同（天和三・八・廿九）」

秋山

4 又も来むけふは紅葉を松か根にたけかりくらす秋の山ふみ

「4 部類現 5308 作者「後西院」「天和三・八・廿九」、『水日集』723 「天和二年八月二十九日」初二三「またもこむ今日ほもみぢを松かねに（イ）そめあへぬ紅葉を松のした蔭に」

々々

通茂

5 山はまた霜まつ露の下染にまじるは、その色もわかれず

「4 部類現 5309 「同（天和三・八・廿九）」

々々

時量

6 露やしる霜よりさきに秋の色をよそほひなせる山のすかたは

「4 部類現 5310 「よそほひなすか」「同（天和三・八・廿九）」

秋鳥

員丸

7 めつらしな雲霧はらふ秋風にさそはれきぬる初雁のこゑ

々々

通茂〔四四丁表〕

8 ね覚してうきかすそへぬ枕やは有明の月の鳴の羽かき

「4 部類現 5314 「うき数そえぬ」「天和三・八・廿九」、『中院通茂和歌集』

585 詞書「天和三年後西院当座御会秋鳥」

々々

実種

9 なれにけり秋の深山をけさいて、庭にことりの色くゝの声

「4 部類現 5315 「同（天和三・八・廿九）」

秋恋

10 あはれ我ちきりはかる、真葛原うら吹風はなをさりの秋

「4 部類現 7626 作者「後西院」「御集」、『水日集』726 「同（天和）三年八月二十九日」

々々

実富

11 つれなさの色もかはらて松杉の秋をもしらぬたくひかなしき

「4 部類現 7626 作者「後西院」「御集」、『水日集』726 「同（天和）三年八月二十九日」

々々

時方

12 しらせはや妻恋わひて我もしるねになきぬへきよるの思ひを

秋旅

意光

13 ねられねはなれぬ旅ねにいふせさも思ひあつめし秋の夜なかさ〔四五丁表〕

「4 部類現 8888 「天和三・八・廿九」

々々

保春

14 宿からむ里みえわかす旅衣八重にかさなる霧のまよひに

「4 部類現 8889 「同（天和三・八・廿九）」

々々

行豊

15 海山のなかめはかほる旅ねにも名におふ月の都わすれす

〔4部類現 8890〕同〔天和三・八・廿九〕

《22 天和三年九月二十七日御会》

九月廿七日

御会

深山紅葉

1 先染ておくはまはらにちる紅葉は山は木末色かはる比

〔4部類現 5188〕作者「後西院」〔天和三・九・廿七〕、『水日集』727 同〔天和三年九月二十七日〕結「色かはるまで」

逢不会恋

2 などてかくちきり跡なく成ぬらんけなはけぬへき身は残る世に

〔2新後明 1287〕作者「後西院」、4部類現 7238 作者「後西院」〔天和三・九・廿七〕、『水日集』729 同〔天和三年九月二十七日〕

員丸

3 露時雨深き山へはまたきよりそめて千入の紅葉色こき〔四五丁表〕

4 おもはずも契りかひなく絶はて、うき年月そなかに積れる

左大臣藤原基熙

5 なかれてし去年の水上とめ入て太山の紅葉ちらぬ間にみむ

〔4部類現 5189〕同〔天和三・九・廿七〕、『応円満院殿御詠歌』900

6 人そうき我はわすれすみし夢をまことの夢に今はなせとや

〔4部類現 7240〕『天和三』、『応円満院殿御詠歌』1195

兵部卿幸仁親王

7 あかなくに分入てみむもみち葉もふかき山路のおくはいかにと

〔4部類現 5190〕同〔天和三・九・廿七〕

8 つれなさをなけくそうつ、夢とたに逢みしことは思ひさためす

三二

〔2新後明 1288〕初「つれなきを」三「夢にたに」、4部類現 7242 初「つれなきを」三「夢にたに」〔天和三〕

権大納言藤原経慶

9 麓にはまた染あへぬ紅葉はの分入山そ色ふかくなる

10 夢ならて夢かたととる一夜のみかはすうつ、の手枕そうき

権中納言藤原資茂〔四六丁表〕

11 なくしかの声きくかたに分みはや露おく山の木々の紅葉々

〔4部類現 5191〕同〔天和三・九・廿七〕

12 忍ふそよつらき心の関守もうちねし夜半の昔語りを

〔4部類現 7253〕天和二・九・廿七

正二位平時量

13 分いらんかさしてかへるもみち葉を我もみ山のしるへにはして

14 あひみつるむかしをいまにとはかりの思ひくるしき賤のをたまき

〔4部類現 7254〕同〔天和二・九・廿七〕

従二位藤原実種

15 分入てみぬ方もなし紅葉には染しこ、ろも深き山かな

〔4部類現 5192〕同〔天和三・九・廿七〕

16 枯はてし一夜はかりの契りにて我身を秋の霜の下草

〔4部類現 7255〕同〔天和二・九・廿七〕

正三位藤原実富

17 露時雨かかる山路の秋の色いかに染てかふかき紅葉々

18 逢とみしむかしも今も同し世にもとの身ならぬ我ぞ悲しき〔四六丁表〕

〔4部類現 7256〕同〔天和二・九・廿七〕

従三位藤原意光

19 露霜も分入ま、に奥深きもみちの色そは山にもにぬ

20 つれなさにたちかへるへき契りとて中く人やうらなかりけん

中務大輔源資冬

21 柴人の折てかへるにしられけりみ山かくれにそむる紅葉々
22 かはらしと契立ぬるかねこともあたになり行人のつれなき

修理権大夫藤原保春

23 枝折して花に分にし道ならて紅葉にたとる秋の深山路
24 みしや夢あはぬ月日はうつゝにてたえける中の契悲しき

〔4部類現 7257〕同〔天和二・九・廿七〕

左近衛権中将藤原隆慶

25 世にしらぬ深山にあたら色とてや紅葉折そへかへる柴人〔四七丁表〕
26 ありしよを夢かとはかり思出て又もあひみぬ契かなしき

〔4部類現 7258〕同〔天和二・九・廿七〕

左兵衛権佐藤原宣勝

27 露霜のふかき山路のみち葉にふもとの木々は色もよはす
28 逢ことのたえぬる今はしのふそよわかれにき、し鳥のつらさも

少納言平時方

29 染くし色の千入もおくふかく分きてこそはみねの紅葉は
30 なからへてさらにおもひをつくせとやなかくつらき情なりけむ

〔4部類現 7259〕同〔天和二・九・廿七〕

同 行豊

31 山ふかくわくる心もあさからぬ色の千入の紅葉ちらすや
32 ありし夜のうつゝ、忘れぬ心には逢てふ夢も何かたのまむ

〔4部類現 7260〕同〔天和二・九・廿七〕

左近衛中将藤原雅豊〔四七丁裏〕

33 都にはまた染あへぬ秋の色のみ山は深き木々の紅葉は
〔4部類現 5193〕同〔天和三・九・廿七〕

34 契りきやありしその夜のかねことも昔かたりの夢になせとは

〔4部類現 7261〕同〔天和二・九・廿七〕
大膳大夫藤原長義

35 おくふかき紅葉の色にわけ入てしらぬ山路にけふもくらしつ
36 かはらしと契りし中も絶はて、あはぬつらさに立帰りぬる

〔4部類現 7262〕一「契りし時も」三「中絶て」同〔天和二・九・廿七〕

《23 天和三年九月二十七日御当座》

同日

御当座

早秋

貝丸

1 衣手に今朝吹かへて秋きぬと身にしみそむる風の音かな

乞巧奠

基熙

2 織女にたむくる琴のをのつからかはるしらへやあふこなるらん

〔応円満院殿御詠歌〕647

萩風

通茂〔四八丁表〕

3 いつまでか夕とのみはかこちけんうきはね覚の萩のうはかせ

萩露

4 こほる、は下枝の玉よ萩か花よしおれおらは落ぬへき露

〔2新後明 629 作者〕後西院〕四「よも折らはをれ」、4部類現 3693 作者〕後西院〕四「よし折はをれ」天和三・九・廿七、『水日集』731 同〔天和三

年九月二十七日〕

秋夕

雅豊

5 夕くれの秋にはたへぬあはれさようきはならひと思ひしりても

〔2新後明 602 四「うきは夫そと」結「ならひしりても」、4部類現 4193 四「うきは哀と」結「ならひしりても」〕同〔天和〕三・九・廿七〕

初雁

時方

6 ほのかなる声も珍し暮ふかき霧のそこともわかぬ初雁

秋田

基瀬

7 淋しさはをしか妻とひ月やとる田面の秋をもる賤やうき

〔4部類現4220〕「天和三・九・廿七」、『応円満院殿御詠歌』736

夜鹿

幸仁

8 をのか妻あはぬ思ひに明るよをねにたて、こそ鹿は鳴らめ〔四八丁裏〕

〔2新後明692結〕鹿も鳴らめ、4部類現4071結「鹿も鳴らめ」〔同（天和）三・九・廿七〕

暁虫

9 思ひやれうらむるむしも独ねにきけはよのつねならぬあかつき

〔2新後明701作者〕後西院「二」「うらむる虫の」、4部類現3989作者〔後西院〕「二」「恨る虫の」〔天和三・九・廿七〕、『水日集』733「同（天和三年九月二十七日）」

山月

資冬

10 小夜あらし吹はらひてし木の間より山端晴て出る月影

〔4部類現4432〕「山松はれて」〔天和三・九・四〕

湖月

実富

11 かけきよし志賀の浦浪よるくはてらす鏡の山のはの月

〔4部類現4561初〕「かけきよし」〔天和三・九・廿七〕

野月

保春

12 名残あれや秋も末の、草の原霜にさえたる月の遠方

渡月

行豊

13 行かへる今の渡のわたし舟川瀬の月によるもうかれて

庭月

長義〔四九丁表〕

14 よなくの月にみかきて玉とみる光も清き庭の真砂地

〔2新後明788四〕「立るもきよき」、4部類現4639四「立るも清き」〔天和三・九・廿七〕

関霧

宣勝

15 明わたる関の戸さしに立こめてよをのこす霧やあふ坂の山

〔4部類現4829〕「関の戸さしは」〔天和三・九・廿七〕

聞掃衣

時量

16 聞もうしうちもねよとの鐘ならてくるれはひ、く里のきぬたは

〔4部類現4894〕「打もねぬよの」〔同（天和）三・□・廿九〕

17 千とせともかきらぬ秋は長月のけふ九重のさくのかかつき

〔4部類現4979〕「天和三・九・廿七」

杜紅葉

実種

18 吹のこせくれ行秋の紅葉々になもいとほる、木からしの杜

〔4部類現5212〕「天和三・□・廿七」

河紅葉

隆慶

19 わたるへき方こそなけれ山河のあさ瀬しら浪紅葉なかれて〔四九丁裏〕

九月尽

意光

20 明日は又きのふの秋のかたみとや同したもとの露もしほらん

〔4部類現5303結〕「露もしほれん」〔天和三・九・廿七〕

《24 天和三年十月二十九日御当座》

十月廿九日

御当座

初冬時雨

通茂

1 色そはむ梢にまちしはつ時雨空にひまなき冬は来にけり

〔4部類現5348〕「天和三・十・廿九」、『中院通茂和歌集』637詞書「天和三年後西院当座おなし心を」

霜埋落葉

2 散ま、につもる朽葉を白妙にしもこそ庭の朝きよめすれ

「4部類現⁵⁴⁷⁶作者「後西院」「天和三・十・廿九」、『水日集』740「同（天和三年十月二十九日）初「しろたへ（イ）ちるままに」二二三「つもの朽葉をはいろかへて（イ）しろたへに」

屋上聞霰

隆慶

3さらてたに夢もむすはぬ閨の上に音もあらしに霰みたる、

古寺初雪

定淳

4麓にはつもるともなき初雪をけさ珍らしきみねの古寺」（五〇丁表）

「4部類現⁶¹⁵⁷題「古寺雪」二「くもるともなき」「天和三・十・廿九」

庭雪厭人

意光

5とはれぬもなか／＼うれし庭の面は跡おしまる、雪のあしたを

「4部類現⁶¹⁹²結「雪のあしたは」「天和三・十・廿九」

海辺松雪

定経

6朝またき降つむ雪にわかぬ浦やいそへの松の色もわかれす

水江寒蘆

実富

7吹風にそよくともし霜こほるみ鳴かくれにたてるかれあし

湖上千鳥

行豊

8志賀の浦やさ、浪氷る汀にもなれのみなきてよるちとりかは

寒夜水鳥

長義

9よもすから鳴音もさむし鴛鴨のむれてうかへる庭の池水」（五〇丁裏）

「4部類現⁵⁸⁸⁰四「群てそ帰る」「天和三・十・廿九」

歳暮澗水

保春

10澗水はむすふ氷によとむ間もせきと、めすや暮るとし波

「4部類現⁶⁴³⁹初「ほら（ト）の水は」「天和三・十・廿六」

初尋縁恋

幸仁

11いかさまに先いひなしてとひよらむちかきあたりのかきねたつねて

「2新後明¹¹⁷⁶、4部類現⁶⁷¹⁴「天和三・十・廿九」

祈不逢々

実種

12いのれとも神はうけすやきふね河あふせは波にたどる計そ

「2新後明¹¹⁹⁸、4部類現⁶⁷⁹¹「天和三・十・廿九」

契経年々

資冬

13契り置しことの葉あたにくちはて、うき年月そ中につもれる

「2新後明¹²¹⁶四「うき年月を」（五二丁表）

隔遠語恋

時量

14恋わひぬあらぬさはりやあら海の舟路にゆるす便まつ間も

互恨絶々

時方」（五二丁表）

15うきながら絶さらましをせめてわか恨をたへて人にかくさは

「2新後明¹³¹²三「せめて猶」結「人にかこたは」

雨中緑竹

光雄

16色かへぬ竹の青葉も染るかとぬれてしくれにそふとりかな

「4部類現⁹²⁵¹三「ぬれて時雨を」「天和三・十・廿九」

関路行客

資茂

17音羽山あらしは白く明るよになを陰くらきせきの杉むら

「4部類現⁸⁶⁰⁷「天和三・十・廿九」

山家人稀

員丸

18冬は猶道も木葉に絶はて、人はとひこぬ太山辺のさと

「4部類現⁹¹⁵⁰「天和三・十・廿五」

寄木述懐

19いたつらになすなよ心なをき木にまかれる枝もありとゆるして

「3新題林⁸⁹²¹作者「後西院」、『水日集』741「同（天和三年十月二十九日）」

社頭祝言

幸仁

20かきらしな内外の宮の宮はしらたて、ちとせは幾かへりをも」（五二丁裏）

「2新後明¹⁹⁸⁰結「幾かへりとも」

《25 天和三年十月二十九日》

十月廿九日

寒草霜

1 いづらそのなまめきたちし女郎花あはれいた、く霜のすかたは

〔4部類現⁵⁶³⁰作者「後西院」初「いつくその」「天和三・十・廿九」、『水日集』735「同（天和三）年十月二十九日」初「いづくそ^らの」

遠村鶏

2 ひとりねの枕にき、てうらみすよ夢路もとをき里の鳥かね

〔『水日集』736「天和三年十月二十九日」

員丸

3 朝なく入江のあしのおきふしてそよつかれはの霜そさむけき

4 かり枕夕つけ鳥のきこえきてありとしらる、山本の里

〔4部類現⁹⁵⁵⁷作者「後西院」三「きこへ^えきて」「天和三・十・廿九」

左大臣藤原基熙

5 かれたてる色もみえず朝霜ををのか物なる花す、きかな

〔4部類現⁵⁶³¹三「朝霜の」「同（天和三・十・廿九）」、『応円満院殿御詠歌』979

6 鳥のねそ明ぬとつくる月の入遠山もとはくらき一むら

〔4部類現⁹⁵⁵⁸「同（天和三・十・廿九）」、『応円満院殿御詠歌』1509

兵部卿幸仁親王

7 人めさへかれの、霜のむらくに残るす、きやたれまねくらん

〔4部類現⁵⁶³²「同（天和三・十・廿九）」

8 さそひきてあかつきつくるあらしかなとを里に鳴鳥の八声を

〔4部類現⁹⁵⁵⁹「同（天和三・十・廿九）」

正二位源通茂

9 風待しもとあらの萩の露も今ふる枝にかろき霜のさむけさ

〔4部類現⁵⁶³³二「もとあらの萩（の）」同（天和三・十・廿九）」、4部類現

5635 三「露に今」「家集」

10 明る夜の尾上のかねは雲こめて鳥のねしらむ山本の里

〔4部類現⁹⁵⁶⁰「同（天和三・十・廿九）」、『中院通茂和歌集』995詞書「天和三年後西院月次遠村鶏」

正二位平時量

11 冬かれをしらぬ物からをく霜のさむき名た、る菊のあやしき

〔4部類現⁵⁶³⁸四「寒き名たてる」結「菊やあやしき」「天和三・十・廿九」

12 告ぬるもきかてやねなん里遠く夜深き鳥の八声ならすは

従二位藤原定淳

13 かれわたる中にましりて草の葉のむらくみゆる霜もさむけし

14 はるかなる麓の里の鳥かねもね覚しつけきあかつきそきく

従二位藤原実種

15 枯てたに夜の花にもおとらしな村くみゆる霜の冬草

〔4部類現⁵⁶³⁹「同（天和三・十・廿九）」

16 住人の有としられて暁の鳥の鳴音もとをき一むら

正三位藤原実富

17 みし秋の露のちくさに咲かはる霜のかれの、色もさむけし

18 明るよをつけくる鳥の声ちし里の中道ほとへたて、も

〔4部類現⁹⁵⁶¹「同（天和三・十・廿九）」

従三位藤原意光

19 枯はてし草葉も霜の花にさへかきねはさらに秋しのへとや

20 しつけしな月はほのかに鳥かねも遠山本のある夜の空

中務大輔源資冬

21 秋にみし野へのちくさは枯果てむらくをける霜の下草

22 鳥の音もそれかあらぬか聞わかす暁ふかき遠の一むら

修理権大夫藤原保春

23 いつしかに草のまかきは冬かれてをく霜しろき色も寒けし
24 夢さめてきけはかすかに鳥の音のまた明果ぬ遠の一むら

左近衛権中将藤原隆慶

25 冬枯のまかきは月の残るか草のはしろき霜のいろかな

26 遠方の里みえそめて庭鳥の声のうちよりあくるしの、め

右近衛権中将藤原定経

27 みし秋の俳そなき百草の花も残らぬ霜のまかきは

28 里遠みそことはわかぬ鳥か音も枕に近き明ほの、空〔五三丁裏〕

少納言平時方

29 それたにもしはしなきへそ花とみて垣ねの草に結ふ朝霜

〔4部類現⁵⁶⁴⁰〕「天和三・十・廿九」

30 鳥か音はつけの枕にかすそひぬ又たか里そかすかなる声

同 行豊

31 心して庭に一むらかり残すす、きは霜の花をみるとや

〔4部類現⁵⁶⁴¹結〕「花をみると」同〔天和三・十・廿九〕

32 暁をつくる尾上のかねてきく鳥はいつくそ里遠き声

左近衛権中将藤原雅豊

33 真萩原忘れぬ秋の色ならぬふる枝の霜の花もめつらし

〔4部類現⁵⁶⁴²結〕「色もめつらし」同〔天和三・十・廿九〕

34 ふかき夜の夢さますらし声しきる夕つけ鳥の遠の里人

大膳大夫菅原長義

35 秋にみし花のまかきも冬かれて置霜ふかき色そはへなき〔五四丁表〕

36 おき出て旅行道に鳥のねをきくかた遠き里の一むら

《26 天和三年十一月二十五日 御当座》

十一月廿五日

御当座

はつゆき 基熙

1 春の花の咲いてんにもならへかしけさまちえたる木々の初雪

つ 同 行豊

2 つきてふれ積るも消てはつ雪は木すゑの花とみる程そなき

ゆ 同 定経

3 夕まくれさえこし風も音たえて庭しろたへにふれるはつ雪

き 同 貝丸

4 きえぬまを人にみせはや庭の面にけさめつらしく積る初雪

をの、すみかま 実富〔五四丁裏〕

5 遠近におなしおもひをたてそへてけふり隙なきをの、すみかま

の 同

6 のほりゆく煙の色はうすくこく雪のくまなるをの、すみかま

〔『水日集』747題〕「小野の炭竈」同〔天和三年十月二十九日〕

の 同 時量

7 残るらしをの、すみかま雪の内もけふりをたえぬ里の通路

す 同 時方

8 末遠く立こそそのほれ山風に小野のすみかまほそき煙も

み 同 隆慶

9 みるま、にこなたかなたに立のほる煙そなひくをの、すみかま

か 同 意光

10 かすかなる賤かしわさも一すちの煙にしるきをの、すみかま〔五五丁表〕

ま 同 定淳

11 檜檜原みな白妙の雪の色にけふりさひしきをの、すみかま

う つつみ火 長義

12 うきこともうれしきふしもおもふとち語りあはする埋火の本

つ 同 実種

13つきそへし炭や幾度老か身のよはのすさひはむかふうつみ火

同 光雄

14砌なる松の雪さへうつみ火にむかひてみればあたくかけにて

同 保春

15ひまもとめふき入風をさゆるともしらすむかへる閨のうつみ火

あかつきは 資茂〔五五丁巻〕

16あしかもの羽音そさはく暁は入江の波や氷とつらん

同 基熙

17かきりなき心ひとつにあかつきはみし世みぬ世を思ひつ、けて

同

18月に雪光あひたるあかつきはなに、くらへん何にたとへん

同 幸仁

19きし方も身の行末もとりに、に歎つきせぬ暁はうし

同 通茂

20羽かはすみきはのをしも暁はこほる夜床にねられすやなく

《27天和三年十一月二十五日御月次》

十一月廿五日

御月次

浦千鳥〔五六丁巻〕

1あはれなりちとりも妻を恋侘て鳴音にまかふすまの浦浪

〔4部類現⁵⁸²⁹作者「同（後西院）」四「鳴音にまよふ」「天和三・十一・廿五」

五〕、『水日集』743「同（天和三）年十一月二十五日」

寄衣恋

2はかなしやかさねて寝しを小夜衣かへしてみつる夢とたとるも

〔2新後明¹⁵²⁷、4部類現⁸³⁵³作者「後西院」「天和三・十一・廿五」、『水日

集』745「同（天和三年十一月二十五日）」

三八

貝丸

3浦ちとり鳴こゑ遠く鳴海潟まなくよせ来る浪にさはきて

〔4部類現⁵⁸³¹「天和三・十一・廿五」

4袂さへくちてやもれん小夜衣人めをつ、むなみたかはかて

左大臣藤原基熙

5夕塩はいまそひかたに鳴海潟とをよる浦に千鳥おりゐて

〔4部類現⁵⁸³²「同（天和三・十一・廿五）」、『応円満院殿御詠歌』1007

6いかにせむ我恋衣かへしても夢は涙にぬる夜なければ

〔4部類現⁸³⁵⁴「同（天和三・十一・廿五）」、『応円満院殿御詠歌』1332

兵部卿幸仁親王

7夕まくれ友やまとへる行かへりおなしうらわに千鳥なくなり〔五六丁巻〕

〔4部類現⁵⁸³³「同（天和三・十一・廿五）」

8なつかしな人香にしめはかへるさのわか衣手は我身なからに

〔4部類現⁸⁴⁵⁵「同（天和三・十一・廿五）」

正二位平時量

9村千鳥こゑさたかにもよる波は氷る磯間の浦つたひなく

〔4部類現⁵⁸³⁴「同（天和三・十一・廿五）」

10人こふる思ひはきえぬ夜床寝も霜の衣そさむさおほゆる

〔4部類現⁸³⁶¹三「夜床ねに」結「寒（と）う覚ゆる」「天和三」

従二位藤原定淳

11しほ風もさゆるふけの浦ちとりよせくる波に立さわくこゑ

〔4部類現⁵⁸³⁵初「汐風に」「同（天和三・十一・廿五）」

12あふことはいかにまとをのあま衣しほたれまさるなけきのみして

従三位藤原意光

13すまの浦や夕波ちとりなく声もところからそふ哀とそきく

〔4部類現⁵⁸⁴¹「天和三・十一・廿五」

14 いかその人にかさねて小夜衣あふ嬉しさを袖につまむ

〔4部類現 8362 同(天和三)〕

中務大輔源資冬〔五七丁表〕

15 浦風のあらいそ浪に声そへて行かへりなく村ちとりかな

〔4部類現 5842 同(天和三・十一・廿五)〕

16 いかにせむひとりの床の小夜衣かはくまもなき袖の涙を

修理権大夫藤原保春

17 なみ枕聞はうきねの友千鳥うら風さゆる与謝のみなどに

〔4部類現 5843 同(天和三・十一・廿五)〕

18 かへしてもうしやかひなき思ひかな夢もむすはぬよるの衣は

〔4部類現 8363 同(天和三)〕

左近衛権中将藤原隆慶

19 とまり舟うきねさひしき浦浪にあはれを添て鳴ちとり哉

〔4部類現 5844 同(天和三・十一・廿五)〕

20 人こゝろいつうちとけんよなくのかたしき衣氷るなみたま

右近衛権中将藤原定経

21 須磨あかし更行月にこゑさえてをのかうらく千鳥鳴なり

〔4部類現 5845 同(天和三・十一・廿五)〕

22 いかにせん逢夜も波のあま衣ほさてうらみにしほる袂を〔五七丁表〕

〔4部類現 8364 同(天和三)〕

少納言平時方

23 風あらし磯辺の千鳥たちわかれ浦より遠の友さそふ声

〔4部類現 5846 同(天和三・十一・廿五)〕

24 うき中は契りまとをのあま衣うらみにたえずぬる、みをみよ

〔4部類現 8365 結「ぬる、とをみよ」同(天和三)〕

少納言平行豊

25 難波渦あしの葉分の浦風の音にさわきてたつ千とりかな

〔4部類現 5847 同(天和三・十一・廿五)〕

26 色にいてはいか、忍ふのすり衣みたれしとのみおもふ心を

大膳大夫菅原長義

27 ねられすよ夜さむの袖の浦風に妻恋かねて千鳥なく声

〔4部類現 5848 四「妻とひかねて」同(天和三・十一・廿五)〕

28 あはれわか涙の床のぬれ衣うらみかひなく朽やはてなん

〔4部類現 8366 結「独はてなん」同(天和三)〕

権大納言藤原経慶

29 かせさゆるよはもふけるのうら千鳥波の立居に声さわく也〔五八丁表〕

30 契り置て待夜むなしきから衣ころもへぬると人はしらすや

《28 天和三年十二月十六日御当座》

十二月十六日

御当座

山雪

1 降初てめつらしとみし思さへつもりつもれる雪の山かな

〔2新後明¹⁰⁴³作者「後西院」二「めつらしと見る」、4部類現⁶⁰⁶⁴作者「後西院」二「めつらしと見る」結「雪の山哉」天和三・十二・十六、『水

日集』753「天和三年十二月十六日」結「雪の山のは」

岡々

員丸

2 このころはゆき、の岡も名のみして雪こそつもれ人はかよはず

〔2新後明¹⁰⁴⁹、4部類現⁶⁰⁹⁰「天和三・十二・十六」〕

瀧々

資茂

3 朝またき音も氷て瀧津浪か、る岩根につもる白雪

関々

幸仁

4 降つもる雪にも絶すあふ坂の関路そしけき往来しらる、

「2新後明1053四」「関路そしけき」、4部類現6104「天和三・十二・十六」
杜々 定淳（五八丁巻）

5此ころの雪にはさすか色かへてときはの杜の木々の白妙
「4部類現6093」「同（天和）三・十二・十六」
浦々 保春

6爰かしこ立る煙のうすくこくゆきにはへある塩竈の浦
「4部類現6135」「天和三・十二・十六」
河々 時量

7よるの浪氷かさねて朝河のあさせは白く雪そつもれる
鳴々 時方

8心して残るもあかぬなめかな雪も友まつ松のうらしま
「4部類現6143結」「松かうら鳴」「天和三・十二・十六」
渡々 定経

9舟かよふ淀の川瀬のわたし守雪もいとほす行かへるらん
「4部類現6144」「同（天和三・十二・十六）」
橋々 行豊

10ふりつもるまゝの継橋跡つけてゆき過かたき雪のうへ哉（五九丁巻）
「4部類現6145」「同（天和三・十二・十六）」
松雪 隆慶

11松の葉のいつともわかぬ緑さへけさ白妙に雪ぞ積れる
「4部類現6216作者」「隆豊」「天和三・十二・十六」
檜々 意光

12吹まよふ山風さむく降雪に檜原かうへはいと、くもりて
「4部類現6230結」「いと、くもりぬ」「天和三・十二・十六」
杉々 雅豊

「4部類現6233」「天和三・十二・十六」
榎々 通茂

14神無月時雨にたへし榎のはもけさ色かはるみねの初雪
「4部類現6235三」「まきの葉、」（注）「天和三・十二・十六」、『中院通茂和歌集』
724詞書「天和三年後西院当座榎雪」

15神山の峰の榎葉ゆふしてをかくるとみえて雪ぞ積れる（五九丁巻）
「4部類現6236」「同（天和三・十二・十六）」
榎々 長義

《29天和三年十二月十六日御月次》
十二月十六日 御月次

雪朝眺望
1今朝の間は雪より外の山もなし不二やいかなる色をそふらん
「4部類現6256作者」「後西院」「天和三・十二・十六」、『水日集』751「天和二年十二月十六日」結「色を添（みそ）ふらむ」

窓前栽竹
2まことに植てかつふる雪もしのへ竹忍ひかたしや玉くたく声
「3新題林8409作者」「後西院」、『水日集』752

員丸
3遠近の山は色わく色もなしみな白妙の雪のあけほの
4窓ちかくうへをく竹のよなく、にをとつる、風を雨かとそきく
「4部類現9291四」「をとつる、風（も）」結「雨かとそきく」（時々）「天和三・十二・十六」

左大臣藤原基熙

5軒端よりおなし光にみわたせは雪の朝けそとを山もなき
「4部類現6257結」「遠近もなき」「同（天和三・十二・十六）」、『応円満院殿御詠

歌』1050 結「遠近もなき」

6 すぐなるを心にうつしうへ置いて身にならへとの窓の呉竹〔六〇丁表〕

〔4部類現 9292 同(天和三・十二・十六)〕、『応円満院殿御詠歌』1454

兵部卿幸仁親王

7 さやけしな雲は残してこの朝けうつみはてたる雪のとを山

〔4部類現 6258 二〕「雲は残らて」四「むもれはてたる」同(天和三・十二・十六)〕

8 友とみる心にならへ窓ちかくうへをく竹のなをきすかたを

〔4部類現 9293 同(天和三・十二・十六)〕

正二位源通茂

9 今朝のあさけむかふ鏡の山はれてつゝかたゝの雪もくもらす

〔4部類現 6259 結〕「方もくもらす」同(天和三・十二・十六)〕

10 うつしうへてみるやまなひの窓の竹なをきすかたも空し心も

〔4部類現 9294 同(天和三・十二・十六)〕、『中院通茂和歌集』981 詞書「天和三年後西院月次窓前栽竹」

正二位平時量

11 へたてなく砌の山や遠のみね雪よりゆきのあさほらけかな

〔4部類現 6260 二〕「砌の山を」同(天和三・十二・十六)〕

12 窓ちかくうへしくれ竹露ならてさ枝たれたる霜おもけなり

〔4部類現 9295 結〕「霜おもけなる」同(天和三・十二・十六)〕

従二位藤原定淳

13 朝日かけ出る光も雲はれてくまなくむかふゆきの山の端〔六〇丁表〕

14 うつしうへて心の友とあかすみんなをきすかたの窓のくれ竹

従三位藤原意光

15 しろたへにけさうつもれて波間よりみゆる小嶋そ雪にさやけき

〔4部類現 6261 同(天和三・十二・十六)〕

16 窓ちかくうへしををのかねくらとて竹に鳴よるむらす、めかな

〔4部類現 9296 同(天和三・十二・十六)〕

中務大輔源資茂

17 よのほととのさえし嵐につもるらし今朝白妙の雪のやまく

18 我友と砌にうへし呉竹のよゝに窓うつ風もさむけし

修理権大夫藤原保春

19 朝またきにほふおのへの白雪にみか、れ出るひかりさやけき

20 窓ちかくうつしてうへし呉竹によはのあらしを聞もしつけし

左近衛権中将藤原隆慶〔六二丁表〕

21 朝戸明てむかふ高峰のしら雪にえならずにはふ日影さやけき

22 窓ちかくうへをく竹にぬる鳥の我ためかほになる、夕くれ

右近衛権中将藤原定経

23 名にしおふあつまの山もめにちかくみやこのふしの今朝の白雪

〔4部類現 6262 同(天和三・十二・十六)〕

24 ことの葉のたよりともしなれ窓ちかくうへて友なふ庭の呉竹

〔4部類現 9297 同(天和三・十二・十六)〕

少納言平時方

25 山本の雪をとほ、やうつもれぬ煙を今朝のしるへにはして

26 しつけしなうへにし竹の千尋あるかけしめてすむ窓のあけくれ

少納言平行豊

27 朝日かけにほふ光そたくひなきあまたの雪の峰にわかれて

〔4部類現 6263 同(天和三・十二・十六)〕

28 うへてみる人の心もすなをなる姿に習へ窓のくれ竹〔六二丁表〕

〔4部類現 9298 同(天和三・十二・十六)〕

大膳大夫菅原長義

29 まきあけてあかすなかむる釣簾の外遠山白き雪の朝あけ

30 わか友とうつしてうふる呉竹のよゝをかさねよ窓のまなひに」(六丁表)

(本学文学部准教授)